

けいおん！卒業旅行REMIX

ふとん王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

4人が卒業してから大体1年後くらい。梓の卒業旅行の話です。
やっぱり今回も海外です。

作者はSS初めてで作法とかに疎いので変なところ、誤字等あったらコメント等していただけると幸いです。

けいおん！見たらはまっちゃったのですがSSで鬱多すぎてつらくなったので自分で書こうと思いました。なので鬱には絶対にならないです。

原作コミックスはshufffle以外、全て読んでいます。桜高卒業時で原作から分岐する形になります。よってHighschoolとcollegeのキャラはでてきません。

College、Highschool の設定を一部引き継いでいるので Extra Cassette 人物紹介 を先に読むことをおすすめします。

2019/12/19 追記：人物紹介の情報量を増やしました。それを読むと話が多少読みやすくなります。

2019/1/14 追記：2020/3 から更新再開します

目次

Extra Cassette	
Extra Cassette 1	人物紹介 1
Cassette Series 1	準備編
プロローグ	7
Cassette 1	相談 12
Cassette 2	先輩と後輩 18
Cassette 3	先輩 23
Cassette 4	先生 28
Cassette 5	練習 36
Cassette 6	出発 43
Cassette 7	旅の始まり 50
Cassette Series 2	旅行本番編
Cassette 8	到着 57
Cassette 9	一日目 64
Cassette 10	二日目午前 78

Extra Cassette

Extra Cassette 1 人物紹介1

人物紹介

人物紹介です。小説説明の欄にもありますが、一部の設定をHig
hschool、Collegeから引き継いでいます。どうしようも
ないことですが、一部原作ネタバレを含むのでそれが嫌な人はブラウ
ザバック推奨です。なお、ここにある情報だけでも小説が読めるよう
にはがんばっています。お楽しみいただけると幸いです。

<大学一年生組>

平沢唯

桜高軽音部OG。現在N女子大学一年。パートはギター。自分の
ギターをギー太と名付ける。天然でアホの子な言動が多い。高校時
代は、妹の憂に頼りきりであり、ダメな姉としての側面が強かった。
大学進学後もアホの子ではあるが、時折頼れる感じになったりする。
また、音楽の才能は必ずば抜けており、絶対音感、相対音感が備わって
いる。その他にも集中するとことんやる典型例である。元軽音部
の三人と同じ寮に一人暮らししている。その寮は電車で実家から一
時間くらい。

元放課後ティータイムであり、現在は別名義で四人の軽音活動を

行っている。

——田井中律——

桜高軽音部OG。現在N女子大学一年。パートはドラム。細かいことが苦手であり、雑な性格。高校時代は天然ではないものの、成績は低かった。後述の秋山漣と幼なじみである。現在大学での単位はギリギリ。

元放課後ティータイムであり、現在は別名義で四人の軽音活動を行っている。

——秋山漣——

桜高軽音部OG。現在N女子大学一年。パートはベース。自らのベースをエリザベスと名付ける。真面目な性格であり、成績も良い。かなり克服したものの未だに恥ずかしがりやである。田井中律と幼なじみ。

元放課後ティータイムであり、現在は別名義で四人の軽音活動を行っている。

——琴吹紬——

桜高軽音部OG。現在N女子大学一年。パートはキーボード。眉毛がたくあんである。実家がすごいリッチ。おっとりとした性格であり、物腰やわらか。幼少期からピアノを習っており、とても上手。庶民というものに憧れを抱いている。

元放課後ティータイムであり、現在は別名義で四人の軽音活動を行っている。

<高校三年生組>

——中野梓——

桜高軽音部三年。パートはギター。通称あずにゃん。ツインテ。かわいい。ねこ。自分のギターにむったんと名付けている。由来は

「ムスタング」というギターの名前から。しつかり者だが、先輩たちの前だとペースを崩されがち。両親がジャズ奏者。

大学生一年生組卒業後、軽音部の廃部が危惧されたが、平沢憂、鈴木純が入部したことに加え、さわ子先生が直接職員会議で三人での軽音部の活動は可能であると他の先生を納得させ、廃部を免れた。わかばガールズという名義でスリーピースバンド活動を行っている。ドラムがいらないので普段は打ち込み音源。

——平沢憂——

桜高軽音部三年。パートはギター。面倒見がよく、完璧人間。姉のことを溺愛している。普段は髪を後ろを結んでポニーテールにしているが、髪を下ろすと姉と瓜二つである。料理全般、家事が得意。三年生進級時に軽音部に入部した。ギターを本格的に始めたのはそのときだが、飲み込みが異様に早く、上達している。わかばガールズのメンバー。

——鈴木純——

桜高軽音部三年。パートはベース。天然パーマであり、特技は朝の髪の毛の爆発具合でその日の天気がわかること。もともとはジャズ研所属だったが三年への進級時に軽音部へ移籍した。秋山濤に憧れを抱いている。わかばガールズのメンバー。

<大人組>

——山中さわ子——

桜高軽音部顧問であり、OG。DEATH DEVILというワールドなバンドをやっていた。その頃のイメージを払拭すべく、おしとやかな教師として振る舞うよう心がけている。その努力がみのり人氣教師になっている。通称さわちゃん。独身。

——斎藤——

琴吹家執事。老紳士。やさしい。

——ここから下は「けいおん！」の放映時から時間が経ってしま
い（十周年でもんねー）、各キャラの話仕方などの記憶が曖昧でどの
台詞がどの登場人物のものかわからない人向けです。呼び名、話仕方
についての原作ネタバレが発生します。ご了承ください。——

唯：ほわわくとした話し方。「く」を多用しやすい。「！」も時々使
用。

梓のことを「あずにゃん」

憂のことを「憂」

律のことを「りっちゃん」

紬のことを「ムギちゃん」

さわ子先生を「さわちゃん」

と呼ぶ。他の人は「名前＋ちゃん」で呼称。

梓：本小説のメイン語り手。しっかりとした話し方で先輩、先生には敬語。「……」を時に使う。

唯、漣、律は「名前＋先輩」

紬は「ムギ先輩」

さわ子先生は「さわちゃん」と「さわ子先生」

憂と純は名前のみ。

律：男っぽい話し方。「ー」を多用する。

さわ子先生を「さわちゃん」、フォーマルな場所では「さわ子先生」

憂、純は「名前＋ちゃん」

紬は「ムギ」

他の人については名前のみで呼称する。

漣：しっかりとした話し方。律と会話文がややこしくなりやすい。先輩

サイドの語り手。苦労人で「……」を多用。

さわ子先生を「さわちゃん」、フォーマルな場所では「さわちゃん」

憂、純は「名前＋ちゃん」

紬は「ムギ」

他の人については名前のみで呼称する。

紬：ぽわくつとした話し方。「く」を唯以上に多用する。

さわ子先生を「さわちゃん」、フォーマルな場所では「さわ子先生」

他の人については「名前＋ちゃん」

斎藤（執事）は「斎藤」

憂：しつかりした話し方。

唯を「お姉ちゃん」

律と滯を「名前＋先輩」

紬を「ムギ先輩」

梓と純は「名前＋ちゃん」

さわ子先生は「さわ子先生」

純：律ほどではないが男っぽい話し方をたまにする。

唯、律、滯を「名前＋先輩」

紬を「ムギ先輩」

梓と純は名前のみ

さわこ先生は「さわちゃん」、フォーマルな場所では「さわ子先生」

さわ子先生：基本的に丁寧語、ゆるふわを目指した話し方をする。

紬を「ムギちゃん」

それ以外の全員を「名前＋ちゃん」で呼称

Cassette Series1 準備編
プロローグ

今日は先輩たちといつものファストフードでお茶です。かれこれ会うのは何か月ぶりだから楽しみです。

先輩たち、受験の時は私のことを気遣ったのか知らないけど、メールばかりで全然会ってくれないんですよ？ ひどいです。でもこうして会えて本当に良かった。でもなんで今日、突然みんなで集まるなんて言い始めたんだろう？

「あつ、先輩」

「おー梓」「こんにちは」「元気にしてたか？」「あつずにやああああ」

先輩たちだ。なんだか大人になっちゃった気がするなあ……一人を除いてだけど……。

「梓、身長少し伸びたんじゃないのか？ もう私のエリザベスよりも大きくなったんじゃないのか？」

「もともと大きいですっ！」
なんか濔先輩は変な方向に成長してる気がする。でも、

「それにしても今日は突然どうしたんですか？先輩方も忙しいでしょうし」

「何を隠そう、今日は……」

何をもったいつけているんだろう。やっぱり律先輩もあんまり変わっていないんじゃないや……

「今日は？」

「梓の卒業記念旅行だああああ!!!」

自分のことなのに忘れちゃってた。てへっ☆。いや違う、こんなの私のキャラじゃない。落ち着け私。

「私の卒業旅行って……先輩たち本気だったんですか？」

「もしかしてあずにゃん、留年しちゃった？」

「律先輩とか唯先輩じゃないんだからそんなことあるわけないじゃないですか」（してませんって）

「ん？ 梓、お前今なんて言った？」

あっ、やば。心の声と逆だ。これは……やばい……。

小休止。

「本気に決まってるじゃない。梓ちゃんのために今日は集まったのよ？」

「そうだぞ梓。去年言っただろ？ 来年も行くって」

言ってた。すっごい言ってた。まさか本気だったなんて……。その行動力はどこから来るんだろう。

「卒業旅行って言ったって、そんなお金……」

「どれだけ出せる？ 梓」

貯金はしてるけども、海外旅行行くには足りないかも。

「十万弱ですかね」

「金持ちっ！」

「唯……お前大学生だろ……？」

「どうせりっちゃんもだし〜」

「失礼なっ。私の貯金はマイナス四桁円だぞ！」

「借金してるじゃないですか……早く返してあげてください」

だめだ。この人たちとじゃ話が進まない。何とかしなきゃ……。

「でも十万じゃ足りないですよね？」

どうしよう。親から前借しなきゃいけないかな……？

「ふっふっふ。なんと！今回は往復航空券は紬がくれるぞおおおお」

いや、往復航空券5人分っていくらすると思ってるんですか。場所によっては百万くらいかかると思うんですけど……。

「いや、悪いですよそんな。いくらかかると思ってるんですか。いくらなんでもそんなには頼れないですよ」

「問題なくい！ムギ！説明ヨロシクウ!!」

「はーい！私の家の系列がニューヨークで新しく支社を開くんだけど、そののオーナーさんが、社長の娘がバンドやってたって話を聞いたんだって。そしたらオープニングセレモニーにバンドで演奏してほしいって言われたの。だからもしも梓ちゃんが空いてたらみんなで行こうかなあって」

なんと……規模がでかすぎる……なんてワールドワイドなんだ琴吹家……。

「じゃあニューヨークに行くんですか？」

「ああ、まあ東海岸ならいろんなところに行けるぞ。クリーブランドのロックの殿堂とか行ってみたいよな」

すごい……すごいすぎる……。

「滞在期間はそのオープニングセレモニーに重なってればいつでもいいから、梓ちゃんが合えば行こうかなって。オープニングセレ

モニーは3月13日よ」

「ちよつと待ってください。今調べますね……」

カタカタとケータイのカレンダーを調べると……空いてる。卒業式後だ。

「空いてますっ。全然いけます!」

「あずにゃんさすが〜」

「でも先輩たちはいいんですか? 大学って忙しいんじや……」

「大学生はもう授業ないのよ。長い春休みなの」

おお、自由だ。いいなあ。

「でも、あずにゃんも春からは私たちと同じ大学だもんね!」

そう、なんと私はN女大学に合格したのです。春からはキラキラ大
学生!

「いろいろ教えてあげるぞお〜」

「律先輩にはあんまり教わりたくないかも」(ぜひぜひ!)

あつ……またやっちゃった。これは死んじやうかも……。

「あ、あはははははは……はあ……」

「あれ? 律先輩どうしたんですか?」

「このバカ律、大学で単位をギリギリでとったら、いくつか落としそう
で昨日まで教務科でずっと相談してたんだ。まあ結局何とかなった
らしいけど」

ああ、涙目の律先輩が目には浮かぶ。

「もういいつ。そんな過去の話は置いておいて、いろいろ決めようぜ！」

「そうだねりっちゃん！」

「待ってろくニューヨークく！」

Cassette 1 相談

「そういえば今回は航空券はとらなくていいからツアーはとらなくていいな」

「ホテルですか。ニューヨークとかって物価高いって聞きますもんね」

一泊一人何万とかもするらしいし。私まだ高校生だしそんなには……。

「ニューヨークにいる間は大丈夫よ？　うちの系列がホテルやってるからそこでホテルを安く取ってもらえるの。たしか五人で泊まれるスイートがあつたはずだけど……」

なんだと……。ホテル業までやってるとは……。恐ろしきかな琴吹家よ……。じゃあホテルはいいとして、移動手段はどうしようかな。大きい町にいる間は電車とはバスを使えばよさそうだけど。そういえば先輩たちはもう十八歳だから車の免許とかどうなんだろう？

「先輩方つてもう車の免許取ってたりしますか？」

「もつちろんだよあずにゃん」「当たり前だろ？」

うう……。唯先輩と律先輩の車は乗りたくないかも……。

「ほら、梓の顔がシートベルトなしジェットコースターに乗らされる直前みたいになってるだろうが。心配するな梓、ムギと私も取ってるから。というよりむしろ一緒にとりに行っただよ」

う、うらやましい。いやいや私も憂とか純とかと取りに行けばいいし。全然さみしくない。さみしくないったらさみしくない。

「それなら安心ですな」

「でも二十五歳以下ってレンタカー高いのよ。なんか事故率が高いらしくて。あんまりたくさんは乗れなさそうね。車、うちのを借りられたらよかったんだけど、そうすると運転手もつけるって言うってきかなさそうだから」

「基本的には電車移動になるだろうからな。問題ないだろう」

そしたらとりあえずどこに行くかを決めなくちゃ。一年前にイギリスに行ったときみたいに行きたいところを先輩たちに聞こうかな。あ、でもその前に、

「ごめんなさい、親に行つていいか聞いてきますね」

そういつて私は一度席を立て店ドアの外で親に電話をかける。

「もしもし？ お母さん？ 先輩たちと卒業旅行にアメリカに行こうと思うんだけど、行つてもいい？」

「いやいやハワイとかグアムじゃないって。ニューヨークだよニューヨーク。東海岸を回るの。危なくないかって？ ほかの先輩方と一緒にだし。そうそう、軽音部の先輩。だから大丈夫。いい？ ありがとう！ お母さん！」

そういつて電話を切ると、今度は着信がなった。

「どうしたのお母さん？ なんか言い忘れてたっけ？ うんうん。確かに！ 憂とか純も誘つてもいいかも！ 先輩たちと相談してからになるけど聞いてみるよ」

そういつて今度こそ電話を切つて、私は先輩たちのところへ戻る。

「お待たせしました。いま親と話したんですけど、憂や純も誘ったらどうかって」

「いいんじゃないか？ そういえばあの二人、軽音部に入部したん

だつてな。よかつたな梓」

「私は全然オツケーだよ！　というよりみんなささえよければ憂は私が後から誘おうと思つてただけ」

「ああ、軽音部の後輩だからな！　誘うわないわけにはいかないっしょ」

「いいと思うわ。席はまだ余裕があるみたいだし」

そうしたら今すぐここに呼んじやつてもいいかな。二人とも相談しておきたいし。

「じゃあ今呼んじやつていいですか？　二人も行けるならこの話し合いに参加した方がいいと思うので」

「おう、いいぞ」

ケータイを開いて話の概要を簡潔にまとめて二人に送る。来れると良いなあ。二人とのバンドは今年の学際で一緒に大盛況だったし。おっと、メールだ。えーと、憂だ。えとえと……？

「憂は卒業旅行、ぜひともだそうです。ギター背負つてアメリカだつて息巻いてますよ。いまからここに来るそうです」

そういえばあの子、卒業した時の唯先輩とおんなじくらいにはうまいんだよな……。ギターやつてたの唯先輩の三分の一くらいなのに……。憂、恐ろしい子。

「そうだ！　三人でもバンドやつてるって話だし七人で演奏するのはどうだ？　絶対にすごいぞ。なあ漣、そう思うだろ？」

「そういうえば昔、大所帯のバンドを見てうらやんだっけな。まさか私たちにもできる日が来るとは……」

「おお……漣が感動のあまり泣いている。これは珍しい……。明日はベースが降ってくるな」

「レフティがいいなあ……」

いや振ってきませんから。むしろ振ってきたら危ないですって。おっと、またメールだ。なにになに……？

「純も旅行に行きたいそうです。濤先輩と一緒に弾けるなんてって言って泣いてますよ」

「大げさだなあ」

「今から来るそうです。でも今日湿度高いから純、支度に時間かかりそうです」

「じゃあじゃあその間にさ！ どこに行きたいかのリストアップをしようよ！」

……。
おお、唯先輩にしてはすごくまともな意見だ。成長したんですね

「じゃあ私ニューヨークアイ！」

「いやそんなねえから……」

「ええーりっちゃんひどい」

「私に言うな私に。それじゃこのアホは置いておいて、どこ行きたい」

「まあベタにタイムズスクエアだよな、まずは」

「じゃあ私メモりますね」

ニューヨークってステーキのイメージしかないけど……

「そういえばさつき濤先輩の言ってたロツクの殿堂ってどこにあるんですって」

「クリーブランドだな」

クリーブランドって確か東海岸ではなかったような気がする。

「なにになに？ クリームランド？ そんな夢みたいな島があるの？」
「いやクリーブランドです、クリーブランド。唯先輩もうちよつとしっかりしてください……。でもクリーブランドって確かニューヨークから離れてたような気がします」
「ごめんな、私もよく覚えてないんだ」
「家帰ったら調べておきますね」

帰りに本屋よつてかなきゃ。どんな本買えばいいのなあ。

「ムギ先輩は行きたいとことか無いんですか？」

「私は……みんなと一緒にならどこでもいいわ。強いて言うなら温泉卓球がしてみたい！」

「いや無理ですって……」

どうしてだろう。話が全然すまない。いや理由はわかってるんだけど私じゃどうしようもない。

「梓く、私は本場のハンバーガーってやつが食べてみたい」

「あ、それは私も」

「私も食べてみたい」

「じゃあどこか美味しいところ探しておきますね」

携帯が震えるのを感じた私は電話に出ると憂だった。

「梓ちゃんどこ？」

「二階のいつものとこ。うるさいからわかると思う」

「はーい、いま行くね」

そういい電話を切った。

「二人が来たみたいなので机、もう一個こち持ってきますね」

「私も手伝うよあずにゃん。大事な後輩を一人では働かせられない

「よっ」

「いやこれくらい一人でできますから」

C a s s e t t e 2 先輩と後輩

「おーい、梓く来たぞく」「おはようございます」

純、案の定髪が……。時間かけてもダメだったか……。

それに対して憂のきれいなこと。いつものポニーテールにパステルブルーを基調にしたふわふわの服でなんか……。良い。完璧だ。

「この机座って」

二人が席に落ち着くのを舞って話を切り出す。

「卒業旅行の話ってメールでどこまでしたっけ」

「日程と必要そうな金額だけ」

「詳しく説明すると、かくかくしかじか……。って感じかな」

「これって私たちも行つて良いやつなんてすか？」

「あたりまえじゃないか。相談始めるぞ」

とりあえず、なによりもみんなの予定を聞いてからかな。

「みなさん、三月十二日前後ってどんな感じですか？」

みんなが、各々の携帯のカレンダー、手帳で予定を確認するのをし
ばし待つ。一分くらいが経って、

「じゃあ先輩たちはどんな感じですか？」

「みんな、前後一週間は何も予定はいつてないよ」

よしよし、じゃあ、

「憂と純はっ？」

「私も前夜一週間ずっと空いてる」

「梓ちゃんごめん！ 九日までは予定があつて、時間があるのは十日からの。でもそのあとはずっとフリーだよ」

じゃあ日本を十日にでて四泊六日かな。そうすると、ついて二日目
がライブだ。楽しみだなあ。

「じゃあ家帰ったら予定たてるんで、みんな行きたいところを私に
メールしてください」

「はいよ」「はい」「はい」

日程と行くところは私が独断と偏見で決めるとして、あとは……

「先輩たちって大学でもバンド、続けてるんですよ」

「当たり前じゃないか。ほぼ毎日練習してる」

「じゃあ練習は合わせだけになりますかね」

先輩たちが一緒だから学校の部室は使えないし……そうするとど
こかしらでスタジオ取る感じかな。そういえば最後の学祭の前、教室
使えなくなってスタジオに行ったんだっけ。ほぼ練習しなかったけ
ど。

「あと二週間くらいしかないから巻きで練習しなきゃですね」

「ティータイムは？」

「無しですよ唯先輩。時間ないんですから」

「うう〜」

「わかりましたよ……。ほんの少し、練習前にほんの少しだけですか
らね」

「梓が甘くなってる……」「成長したのね……」

そしたら、スタジオは私が取っておくとして、あとはセットを決め

なきや。

「セットはどうしますか？」

「とりあえずふわふわ時間だよなあ。憂と純弾ける？」

「ぼつちりですよ」「それなりには……」

「こんなに人数いるから曲によって人を分けて最後は全員とかが良いじゃないか？　ずっと私と純で二人ベースがいるってのも何だろ」

「いいね。あずにやんたちのバンドもオリジナルあるでしょ？　それ聞きたいなあ」

「良いですけど、うちのバンドはドラム打ち込みのスリーピースだし……」

「はいはい！　私がドラムどっちもやる！」

律先輩がいればなんとかなるかな。

「ところでムギ先輩、私たちって何分くらい時間もらえるんですか？」

「三十分くらいかしら」

三十分もあればMC入れても結構弾けそうだな。

「そうすると七人で演奏するのが二曲で放課後ティータイムが二曲、わかばガールズで一曲で途中にメンバー紹介のMC入れるとちょうど良さそうですね」

「ああ、そうだな。それぞれの曲目は別々に後から話し合うとして、今は合同演奏の曲目と練習日程の確定かな。どうせ律と唯がだらけるから多めにとらなきや……」

なんとも言えない表情してる……。苦労してるんですね……。

「じゃあ二曲、何がいいですか？　一曲はふわふわ時間で確定で良いと思うんですけど」

「私たちもふわふわ時間ライブで受け継いでるもんね〜」「あれ、なんかところどころ難しいんだよなあ……」

そしたらもう一曲は……あつ、なんか唯先輩が言いたそうにしてる。

「唯先輩、どの曲が良いと思いますか？」

「U & amp; I! それしかない!」

「良いと思うわ」「それが良いんじゃないか？」

早い……みんなの特にお気に入りの曲だからかな。

「ても憂と純弾ける? 私たち確か練習したことあんまりなかったけど……」

「私はこつそり練習してたから大丈夫」「私はお姉ちゃんが家で弾いてるの聞いて覚えちゃった」

なん……だと……。天才ってこの子のことを言うのか……。

「次は練習日程ですね。とりあえず皆さんの空いてる日教えてください」

……

「じゃあこの三回に合同練習ですかね」

思ったより練習が取れない……。いくら大学生が暇だと言ってもすることって思ったよりあるんだね。

「特に唯先輩と律先輩、ぜったいに遅れないでくださいね」

「やだなああずにゃん、私が遅れるわけないよ〜。もう大学生だよ?」

「唯ちゃん、大学で遅刻しすぎて単位、結構危ないのよ? みんなが起こしても起きないから……」

「ムギちゃんがいじめる〜」

今日はこんなところでいいかな。まだ決めるところはあるけどこんなところで今日は十分。

「今日決めたいことはこんなものですかね」

「よし！今日は駅前に新しくできたケーキ&mp;紅茶のお店に行こう！」

「唯先輩、昼食食べたばかりじゃないですか……」

「ティータイムとランチタイムは別だよあずにゃん！」

本当に大丈夫かな……。

C a s s e t t e 3 先輩

帰り道

ケーキ屋からの帰り道、そのまま各々の家へ帰る高三組と別れて四人で寮への帰途につく。日は長くなってきたとはいえ、もう空は暗くなり始めている。街灯も少しずつ点灯し始めるくらいで、昼間暖かくなるからと思つて比較的薄着にしたことが裏目にでてかなり寒い。

「いや、あずにやんたちと話せて良かったよ」

確かに。梓と話すのは二ヶ月ぶりくらいか。受験のときはみんなメールだけにしてたし。あの三人ともうちのN女に進学とは……またみんなのできることと思うと嬉しいな。

そういうえば、家には……帰らなくていいや。たいした用事があるわけでもないし。

「唯は家に一回帰らなくていいのか？ せっかく寮からこっちに来たんだから顔くらい出しといても良いと思うぞ」

「んー。お正月にいったしなく。それにお正月にいったら私の部屋、物置になつてたよ……」

「あーわかるぞ唯。私の部屋も服の入った箱でいっぱいだったからなあ。母さんに聞いたら、『だつて律、四年間は帰つてこないでしょ？』だつてき。冷たいよなあ」

「それにしても、梓ちゃん、私たちが最後に会つたときからなんか大人になつてたわね」

「年寄りみたいだなムギ……」

「失礼なつ。でも、私たちよりも準備の手際が良くてなんか感動しちゃつた」

「親視線かよ……」

「今回の卒業祝、どうしよつか。私たちも大学生になつてある程度余裕もできたことだし、何かしら梓が金銭的に買にくい物が良いと思

うけど……」

曲……にしてもいいけど前は曲だったからな。今回も曲、というだけでは芸がないだろう。うーん……。

「あつ、ギターストラップはどう？ みんなでお揃いの」

「えー、それじゃ私とかムギ、使い道ないじゃん」

「それなら私たちの分は同じデザインで別のものを作ってもらいましょうよ」

「別のものっていったってなあ……」

「キーホルダーとかが良いと思うわ」

私、この前ギターストラップ新調したばかりだしなあ。そういえば唯もじゃなかったっけ。年明けにギターストラップ新しくするみたいなことを言っていた気がする。

「私もストラップがいいかな、このまえギターストラップ新しくしたばかりだし。唯はどう？」

「わたしもキーホルダーがいい。ギターストラップ、この前ちよつと奮発してギー太に合うかつこ良くてかわいいのを買ったんだよねえ」

どう言うのだよ……。

「卒業組はみんな、ギターかベースだから、ストラップで問題ないな。デザインとかも早めに決めないと」

「いつ渡しませうか。卒業式でも良いと思うけど、今からだど日数的に厳しいと思うわ」

「卒業式は別のことをしよう。渡すのは……そうだな……ニューヨークでのライブの前夜とかが良いんじゃないか？」

「良いと思う！ あずにゃんも憂も純ちゃんも、絶対に喜ぶよ」

「そしたら私の方で良い感じのデザインを見繕っておくよ。いくつか

候補を出すから、みんなで決めよう」

「さんせ〜い」「はいよー」「良いと思う！」

「今日は真面目な話があります！」

突然の唯の宣言に三人ともびくつとする。

「唯……突然大きな声を出すもんじやない……」

おもわず言ってしまう。まあこっちもびくりしたしドロ〜ってところだ。

「ごめんごめんつて〜えへへ。そうじゃなくて、私、憂が卒業するから、何かしてあげたいんだよ！　ずっと憂に頼ってきたから、なにかしらしてあげたいんだよ！」

「そういうことか。なら……なら……これといって何も思い浮かばないな。あの子、完璧を全身で体现したような子だからなにをどうすれば良いのやら……」

「そうなんだよ滞ちゃん！　憂は、わたしよりもずっとすごいんだよ！」

「それでいいのかよお姉ちゃん……」

「りっちゃんよりもすごいよ！」

「やかましいわい！」

「料理作ってあげるなんてどうだ？」

「憂の仕事が増えるだけだよ……」

「じゃあ、なにかあげるとかは？」

「ギターストラップあげるのに被っっちゃうし……」

「確かに……」

でもそうすると唯ができることって……そうだ。

「唯ちゃんがアコースティックでU& a m p ; Iを憂ちゃんに独唱するのはどうかしら?」

「先に言われた……。でもアコースティックギターなんてどこにあるんだ? ギー太であるの音が出るとは思えないし……」

「それならうちのギターを貸してあげるわ。ねっ? 唯ちゃんどう?」

「良い……すつごくいいよそれ! でも、ギター、借りちゃって大丈夫なの?」

「大丈夫よ、家の父が昔使ってたやつで今は倉庫にしまっただけから」
「うへへ。それたぶんすつごく高いやつだぞ唯。そもそもギー太じゃないギター、弾けるのかよ」

「練習すれば! まだ時間はあるし」

「一週間くらいしかないけどな」

「がんばる! 憂のためだもん!」

「じゃあ私と唯ちゃんですU& a m p ; Iのアコースティックバージョンを作るところから始めなきゃね。基本的にはメロディに沿って作れば良いからそんなに難しくはならないわ」

「ありがとうムギちゃん」

「明後日までにはなんとか作り終えましょうね」

話も一段落し、沈黙が訪れる。普段話してる時間も好きだけどころして静かな時間をみんなでも共有するのも実は好きだったりする。ぜったい律にからかわれるから言わないけど。

すると、風がびゅうつと吹いて思わず私は首をすくめる。寒い。朝のぼわぼわマインドの私を恨めしくも思いながら私は一つの事に気づく。

「さわちゃん、どうしよう」

「あー……」「困ったな……」「誘っても良いのだけれど……」

「二年間顧問やってもらってるからな。今回の卒業旅行に来てもらいたいよな」

「でも誘おうよ！ さわちやんだって喜ぶよ！」

「じゃあ明日にでも高校に行ってみるか」

さわ子先生、いるといいけど。卒業式前だから忙しかったりするのかな。

そんなこんなで結構歩いていると私たちの寮についた。

「じゃあ明日、また詳しいことを決めるのと、放課後の時間にさわちやんに会いに行こう。じゃ、また明日」

「じゃあおやすみー」「おやすみなさい」「また明日〜」

素晴らしい私は自室に入った。楽しみだなあ、卒業旅行とライブ。

Cassette 4 先生

From：中野梓

To：澁先輩

件名：卒業旅行についてなんですけど

本文：

卒業旅行、さわ子先生も呼びたいんですけど、どう思いますか？

From：澁先輩

To：中野梓

件名：Re：卒業旅行についてなんですけど

本文：

それについてなんだけど、私たちでも呼ぼうって話になったから、先生誘うのお願いして良い？ 最初は私たちでいこうと思ったけど遠くて。

From：中野梓

To：澁先輩

件名：Re：Re：卒業旅行についてなんですけど

本文：

おつけーです。日程とかはこの前話したので確定で良い感じですか？

From：澁先輩

To：中野梓

件名：Re：Re：Re：卒業旅行についてなんですけど

本文：

うん。あれでよろしく。あと、ホテルについてなんだけど、ニューヨークにいる間は四部屋とる感じになりそう。本当はスイートで大きいのがあったんだけど、今改装工事中らしくて。

部屋分け、なんか希望ある？ とりあえずさわちゃんが一部屋の予

定だけど。

これも誘えたなら伝えといてほしい。

From：中野梓

To：漣先輩

件名：Re：Re：Re：Re：卒業旅行についてなんですけど

本文：

わかりました。部屋分けは特に希望はないです。じゃあ、明日結果報告しますね。おやすみなさい。

From：漣先輩

To：中野梓

件名Re：Re：Re：Re：Re：卒業旅行についてなんですけ

ど

本文：

おやすみ。

メールでの会話が終わったことを確認してから、私は自室のベッドの上で転がる。

さわちゃん、来たらいいなあ。去年のロンドンも結局来てたし。あの人、こういうイベント絶対に大好きだよ。もうこんな時間だ。明日は授業ないから登校自体は自由だけどさわちゃんに話をしなきゃいけないから明日の放課後くらいに行こう。

それにそろそろむったんのメンテナンスにも行かなきゃ。受験のせいであんまり弾けてなかったしちようど良い機会だ。

「よしー。行こうー！」

先生を卒業旅行に誘いに学校まで、そのあとはいつもの楽器のお店でむったんのメンテナンスだ。お金ならある……。きれいにしてもらわなくては……。だってアメリカデビューだよ！

ぼちぼち学校までの道のりを歩きがてら、私は春からの大学生生活に思いを馳せる。大学はご存知、単位制というやつでこの単位の決め方によって時間割りが変わるらしい。ついでにいうと、ムギ先輩と唯先輩が平均的、滯先輩がちよつと多めで律先輩が進級ギリギリだそう。もう四人からは所謂逆評定というものをもらっていて。わたしもそれに合わせて授業をとる予定だ。律先輩を反面教師にしなきゃ。そんなこんなで学校につく。もう部活は始まっているようで、グラウンドから運動部の声がする。

「さわ子先生いらっしやいますかくつと。いたいた」

「どうしたの？ 中野さん」

「卒業旅行の話なんですけど……」

突然周囲をチラツとみたさわ子先生は安堵した表情で

「わかったわ。後から部室に行くからそこでまってちよつだい」

「……？ わかりました。部室にいますね」

突然挙動不審になったさわ子先生を不思議に思いながら部室への階段を登る。なんか部室に来るのも久しぶりな感じがするなく。今日は誰もいないけどさわちゃん来るまでちよつと弾きたい気分。

そう思ってジャカジャカとギターを鳴らしているとドアが突然開く。さわ子先生だ。

「待たせちゃったわね」

「いえいえ。お茶でも入れましょうか。ケーキはないけど」

そう、ムギ先輩が卒業後、軽音部部室からはティーセットが無くなるのが危惧されていたのだけれど、先輩の寛大なるご厚意で必要な分+αだけ残してもらえたのだ。さすがに茶葉はないから自分達で持ってきてるし、ケーキから普通のお菓子に格下げにはなっちゃった

けど。

「さつきはごめんね。あんまり卒業旅行で海外に行くことを快く思っていない先生もいるから。で、卒業旅行がどうしたの？ また今年も海外行くの？」

「はい。私たち、卒業旅行でニューヨーク行くんですけど、先生もどうかなくて」

「もうちよつと詳しく聞かせてちょうだい」

おつ、食いついた。

「えつと、三月十日から四泊六日で、途中でライブがあります。飛行機の子ケツトはムギ先輩が出してくれて、ホテルもムギ先輩経由で破格でとれます」

「なにそれ聞いてないんだけど？ ライブやるなんて」

だつて言っていないし。

「じゃあ先生も来ますか？」

「うーん。最近、そういうの厳しいのよ。先生の公私混同なんじゃないかって。卒業生だから良いかもしれないけど……。そうだ。わたしもまたマイルで行くわ。ホテルだけは内緒でお願いしちゃうけど」

「じゃあ伝えときますね」

「待って待って……。ちよつとそこ、仕事が入ってて私だけ二泊四日にしてもらってもいい？ 行く日は一緒に」

「りようかいです。じゃあちよつと失礼しますね」

そう言い携帯を開いて、今回行くメンバーにさわちゃんも行く事と、途中で帰国することをメールの一斉送信で送る。携帯をしまおうとすると、着信音が響いて、その内容を見て思わず笑みがこぼれる。

「唯先輩が、『やったー!!』ってすごい嬉しそうな文面のメール、送って来ましたよ」

「それは嬉しいわね。今日はこのあとどうするの?」

「このあとは……いつもの楽器店に行つてギターのメンテナンスですね。久しぶりなので」

「それはいいわね。唯ちゃんもいつてるかしら……。前科持ちなだけに心配になってきたわ」

「たぶん……さすがに大学生ですし滯先輩も一緒ですし大丈夫ですよ」

「そうだといいわね……。じゃあ今日はこんなところかしら。いろいろ決まったら連絡しようだいね。気を付けて帰るのよ」

そう言つてさわちゃんは部屋から出ていった。唯先輩……またヴィンテージギターもどきのギターになってないか心配だな……。今日の夜メールしておこ。

無事にギターのメンテナンスも終え、家に帰ってきた。お風呂にも入つてもう寝ようか、というところにギターが目についた。そういえばギターのストラップ、けつこう使い古した感じになつてきたから、大学入つてバイト始めたら新しいの買わなきゃ。ふと思ひ出して携帯をベッドの上で開く。

From: 中野梓

To: 平沢憂&amp;鈴木純

件名: 明日と明後日

本文:

しあさつてが一回目の合わせ練習だから、明日と明後日に学校で練習しよう?

そう送つて私は毛布の中に入る。横目に「はい」という二件の

メールをみたけれど、私はあまりに眠くなってしまったのでそのメールを開く気にはなれなかった。

——同じ日、N女大学にて——

「ありがとう、斎藤。突然お願いして申し訳ないわ」

「いえいえ、これを持ってくることくらいお嬢様に喜んでいただけるなら些細なことですよ」

「父はこのことについてなにか言っていた？」

「いいえ、持っていていいかお聞きしたら『自由にして良い』とのことでした」

「よかったわ。じゃあ斎藤、また今度」

「お帰りになられるのをお待ちしております。よい一日を」

斎藤が屋敷に帰るのを見届けてから、私は唯ちゃんの部屋へ行く。

「唯ちゃん、おはよう」

「ムギちゃんおはよう……。いま何時？ えつと……十一時半くらいかしら」

「えっ！ やばっ！ 今日三限だけあるんだよ！」

そう言つて唯ちゃんはバタバタと用意をして大学へいつてしまった。今日はもう期末も終わつて、休講なのだけれど……。あまりに鬼気迫つてたから言いそびれちゃった。

十分くらいすると完全に糸が切れた人形のような唯ちゃんがふらふらと戻ってくる。そのままベッドメイキングもされていないベッドにばたんと倒れ込む。

「ムギちゃん。もう授業ないよ、どうして言ってくれなかったの……。もう無理……ねる」

「ごめんね。あまりに急いでたからなんか邪魔するのも悪いかと思ってる……」

「全然悪くないよ……。むしろ言ってくれない方が悪いよ……」

などとしやべっているベルが鳴る。とてつと唯ちゃんがドアを開けるとそこには滯ちゃんとりつちちゃんがいた。

「おっはよー!」「おはよう」

「おはようございます。今日はギター、持ってきたのよ」

そう言っ私はギターのハードケースを開ける。なんとそこには……。まあ普通にギターが入っていたわ。

「おい……ムギ……」

怯えたような顔で滯ちゃんがこつちを見る。

「これってメチャメチャ高いやつじゃないか!？」

「どのくらいするの？ ギー太何人分？」

「人なのかよ……。定価のギー太一人と半分くらいじゃないか？ どうなんだ？ 滯」

「これ、希少なヴィンテージギターで安く見積もっても定価ギー太三人分は下らないやつだよ……」

「ムギちゃん、そんなの借りて大丈夫なの？」

「大丈夫。唯ちゃんの大事な憂ちゃんへのサプライズだもの。しつかりしなきゃ」

「あびがどう……。ムギちゃん」

「ここらそんな簡単に泣くんじゃない……」

「それじゃ、U & a m p ; I A c o u s t i c . v e r の練習しましょうか。時間も無いし、昨日のうちにわたしが楽譜も編集してきたわ」

「準備が良すぎる……」

「じゃあ練習を始めましょうか」

「ケーキは……？」

「とりあえず一時間練習してからよ？」

「スパルタだよ。助けてりっちゃん！」

「これもお前のためだ。我慢しろ」

「律は自分の課題はやくやりなよ……。それ出さないと単位ないんでしょ？」

「あっそうだった。じゃあ後で聞きにくるよ。じゃあねー。よし！

滞り！ 行くぞー！」

「こんな感じだからじゃあまた後で。期待して待つてるよ」

そう言って二人は部屋から出ていった。りっちゃん、本当に単位大丈夫なのかしら。

「じゃあ練習するわよ！ でも唯ちゃん、リードギターだしほぼ同じだけどね」

「さすがムギちゃん！ 私もがんばるよ！」

こうして練習が始まり、この次の日にはもう完璧だった。この調子なら本番も大丈夫そうね。

明後日は梓ちゃんたちとの一緒に練習だから私たちもそれぞれ練習しなきゃ。そう思った私はみんなに連絡し、大学軽音部の部室へ向かった。

C a s s e t t e 5 練習

「おはようございます」

「ういー」

今日は合わせ練習第一回です。まずはみんなで一回駅前で集合です。先輩たち……まあ主に唯先輩と律先輩なんだけど……が時間通りくるか心配だったけど濬先輩がちゃんと届けてくれたみたい。律先輩は柱によっかかって寝てるけど……。

「律先輩どうしたんですか？」

「梓あく。眠い〜」

「りつちゃん、単位もらわなくちゃ進級できない！ つて言つて昨日はほぼ徹夜でレポート書いてたんだよ〜」

「それは……お疲れさまでした……」

「ねぎらえ〜」

「それはそうと梓、7人で演奏する曲、ベースが二人とギターが三人いて、弾くパートがそれぞれ被っちゃうから少しずつ変えといた。見てくれ」

そういつて濬先輩は私にスコアを手渡す。ペラペラとめくつただけど私たち三人がそれぞれメインを交代で担当するような感じだ。ギターが三人もいるつてよく考えてみればすごいことなんじゃ……。

「ごっめーん！ おくれたー！」

そう言い最後にやって来たのは純だった。まあみんなが集合時間よりもはやく来たつただけで実際はまだ集合時間の5分前なんだけどね。

「私もいま来たようなものだから大丈夫だよ。それじゃ、どこかで軽

くランチをとってからスタジオ入りしましょうか」

「いづくぞ〜」

「どこがいいかしら」

「このまえ良い感じのお店みつけたんでそのお店にしませんか？」

「さすが私の妹だよ憂〜。えらいぞ〜」

「お姉ちゃんの好きなものもたくさんあったよ！」

まだ、この子は姉離れできていなさそうね……。

憂おすすめの店にやってきた……けどすっごいおしゃれだ……。なんか普通にしても入るのにちよっぴり気後れしちゃうくらいには。それなのにあの人たちと来たら……。

「唯ー！ 昼だー！ なんかすっごいおしゃれなとこだぞー！」

「ほんとだよりっちゃん！ パフエあるかな！」

「あるある絶対ある！ いくぞー！」

「おうよ！ だよりっちゃん！」

「騒ぐんじゃない……お前たちよりも高三のほうが静かじゃないか……」

どうしてこんなに元気なんでしょうか……。

一通り食事も終わって話を始める。

「憂〜、純〜。滯先輩が新しくスコア、二曲とも新しくしてくれたからそれ見て〜」

「は〜い」「ほいつ、と」

「で、あとはホテルの部屋決めなんだけど……。くじで決めない？」

「滯先輩、唯先輩が悪い顔してるのできちんと言張っておいてくださいなね」

「やだなあ、あずにやん。別にくじに細工をしようとかだなんて全く全然神に誓って思っていないよ」

安い神様だな。

「それじゃ、みんな、私に好きな数字を送ってくれ。それを小さい順にならべて二人、二人、三人で区切るから。相談はなしだからなく。私はみんなの数字の平均にするよ」

みんな携帯を開いて他の人に見せないように数字だけ書いたメールを送る。ついでに私は「11」だ。誕生日だし。

「よし、全員集まったなく。えっと、唯が10、梓が11、ムギが78で律が……9999……子供かつー」

「だって〜大きいほうが良いと思ったし〜」

「子供だった……。で、純が7で憂が10……。姉妹だな。うーん……. したらじゃんけんしてくれ。買ったほうが10. 1に変えるかんじで」

そう言い二人はじゃんけんをした。勝ったのは……唯先輩だった。もしかして憂、唯先輩を私と同じ部屋にするための策略……? まさか…….

「部屋分けは1、律ムギ私 2、梓唯 3、純憂 だな」

「なんか普通な感じにまとまっちゃいましたね〜」

「まあ寝るときとかだけで基本的には部屋を繋げるドア、開けとくから」

「三部屋もつなげられるんですか?」

「できるらしい。珍しいことだけど」

「そろそろ時間ですね。行きましようか、スタジオ」

スタジオについた。前回（高二的文化祭で部室が使えなかったとき）よりもずっと広いところでちよつと驚く。みんなで割り勘してスタジオの代金を払った後、（先輩たちが出すって言ったけどなんとか高三組で説得してきちんと1/7ずつ出した）防音

室内にはいるとなんか少し緊張した気分になる。

「そしたら最初の三十分はそれぞれ個人でスコアの確認して、その後合わせよう」

「了解です」

そういいみんな各々の個人練習に入る。唯先輩をみると相変わらずチューナーも使わずに完璧に音があつてるしなんなら憂もチューナー使つてない。なんだあの姉妹。

新しくもらったスコアだけど私たちは変わったところはどこかで弾いたようなフレーズになっていたように思ったよりも簡単に弾けることに気づく。瀧先輩の優しさに感謝しながら練習しているとあつという間に30分たってしまった。

「よし30分たつたし合わせるぞ〜」

「瀧ちゃん……ちよつとだけ休憩をください……。死んでしまいます」

「だーめーだ。今日は休憩なし！ 終わったら十分に遊べるから」

「唯ちゃんのために今日はケーキも持ってきたから」

「わたしががんばるよ！」

相変わらずだった……。

「じゃあ歌は基本的に私と唯、それに梓と憂のダブルボーカルをローテーションしていく感じで、きょうはとりあえず最初の半分は私と唯、曲の後の半分を梓と憂でやってみよう」

「じゃあふわふわ時間からですかね」

「律先輩……ドラム走りすぎです……もうちよつと落ち着いてください」

「いやー久しぶりでさく。最近課題のせいであんましドラム叩けてなかったし」

「自業自得じゃないですか……」

「唯ちゃん、その歌詞違うわよ」
「ごめんごめん」

「憂くうまくなつたね」

「本当に上手だな。唯よりも上手いんじゃないか？」

「そんなことは……そんなことはないよね濤ちゃん!!」

「あ、あはは……たぶんないと思うよ。(口が避けても本当のことは言えない)」

「梓は相変わらずうまいし、純のベースも安定してるしなんとかなりそうだな！」

「あっそろそろ時間だ」

「あと10分てどこか」

「最後に二曲合わせてから帰りましょうか」

「よーしきばっていいー!」

「ありがとうございますー」

私たちはそういつてスタジオを出る。このあとどうしよう……？

「先輩たち、このあとどうしますか？」

「うーん、ケーキもせっかく持ってきたしどこかで食べたいところだけど……」

「梓ちゃん、部室が良いんじゃないかな。先輩たちも卒業生のOGだから問題ないと思うんだけど」

「じゃあ学校に行きましょうか」

先輩たちにとっては久しぶりの学校だ。私たちは昨日も練習で来てるからそこまで新鮮という訳ではないけど。まずは職員室に鍵を取りに行く。

「みんな先に部室行ってください。私、職員室に行つて鍵をもらつてくるので」

職員室で鍵をもらい、さわ子先生に先輩たちが来たことを告げるととても嬉しそうな顔で「あとから行くわく帰らないで待つててね」と言っていた。たぶんムギ先輩のケーキが狙いだらうけど。

「鍵持つてきました。待たせちゃったみたいですね」

「いや、私たちも少し回り道してここまで来たから大しては待つてないよ」

「それならよかった」

そう言つて、部室のドアを開ける。

「わあー懐かしいー！ ドラム……は大学に持ってっちゃったからないや……」

「こつちにあつたらここで練習できたんだけどね……」

「まだムギちゃんのティーセットおいてあるんだ！」

「さすがにムギ先輩が持ってきてたような葉っぱはないですけど、それなりのものなら常備してあるので今淹れますね」

「それなら私がやるわ」

「いや、悪いですよ」

「なんか、ここに来るとそうしなきゃいけない気がする」

「じゃあお願いします」

そういつているとさわ子先生が来た。

「みんな久しぶり。私のケーキは？」

「はいはい、ここにありますよ」

「唯ちゃん？ きちんとギターのメンテナンスしてる？」

「ばつちりだよさわちゃん！ 二ヶ月前くらいに行つたばかり！」

……

一年たつても、放課後のこの部屋の雰囲気は全く変わっていなかった。なんか安心。

C a s s e t t e 6 出 発

— N女大学寮唯の部屋 —

「おーい、唯く準備できたか？」

「荷物チェックしに来たわよ」

「なんで？ 私だってもう大学生だしそのくらい余裕だよ」

「いや、梓と憂ちゃんが『おねがいます』って。私たちも心配だし」

「だって前のロンドン旅行の時だって全然忘れ物なかったよ！」

「それは憂ちゃんがほぼやってくれたからだろうが……」

「あっそうだった」

そう、時も経って、明日はもう出発の日です。ムギと私、律はもう準備万端で明日出るだけなんだけど、うちの問題児のことが心配で……。

「そういえば、このまえ話したギターストラップ受け取ってくれた？」

「ああ、昨日私とムギで受け取ってきてもうスーツケースにいれたよ。なかなかきれいに出来てた」

「写真ある？」

「写真は取ってないけど黒い本革に梓が緑、憂ちゃんが赤、純ちゃんが水色のクリスタルでアクセントつけてる感じ。ってこのまえ話し合ったときに見たでしょ？」

「いやー現物が見たくって。でも、もう包んでもらっちゃったみたいだし、実物を見るのは渡すときのお楽しみだね」

「ストラップを渡すの、三日目の卒業記念パーティーのときだよな？」

「ええ、そこで唯ちゃんのU & a m p ; Iも歌おうとおもって」

「どれくらい弾けるようになったんだ？」

「駅前で歌わせても恥ずかしくないくらいには」

「そりゃすごいな。でも、唯って今回はギター太持ってくだろ？ アコースティックギターもってくのは大変なんじゃないのか？」

「さわ子先生がもって行ってくださるそうよ？ 事情を話したら『まかせときなさい！ そういうの大好きよ！』って」

「あーさわちゃんこういうの好きそうだもんなく」

「そのギターはもう渡してあるから問題ないな」

「そしたらあとは唯のスーツケースの準備だけだな！ 私はステイツ

クしか持つてくものないけど……唯はギターのメンテやったのか？」

「もっちらんだよく。弦もこの前張り替えたし」

「そしたら大丈夫か」

「服とかもきちんと入って……る……。唯、パスポートは？」

「え……？ も、もしかして……入って……ない？」

「入ってないな」「入ってないわね」

「それは大変だよ滞りちゃん！ 探さなきゃ」

「当たり前だ！ 全員でいまから探すぞ！ 他の荷物はみんなはいってるから」

こうして唯のパスポートが見つかったのは探しはじめてから三十分後のことだった。あいつ、狭い部屋なのに（私たちと同じ）どうしてあんなに荷物があるんだ……。

「じゃあ明日の朝はやりからきちんと起きろよ」

「もうねるから大丈夫だよ。おやすみ」

同日、梓の部屋

明日出発です。最初は耳を疑っちゃうような提案だったけど、先輩たちは本気で、わたし一人をおいて卒業してしまったことを気にしているのか知らないけどまるで一緒に卒業するようなノリで卒業旅行を計画してくれて、でもそれでいてきちんと私の回らないところはフォローしてくれて。本当に夢の中にいるような気持ち。

スーツケースのパッキングも終えて一息つく。寝る前に一度むっ

たんの調子を見るためにうちの防音室に行こうとすると、ふと軽音部の卒業アルバムが目にはいった。このアルバムは学校の卒業アルバムとは別に作ったもので、先輩方がとった写真をまとめたものだ。

卒業式の日には五人で撮った写真を見ると、あのときの複雑な気持ちが思い起こされてちよつとセンチメンタルな気持ちになるけれど、四月からは先輩たちと同じ大学に行けるという事実が私の心を満たす。少なくとも喜びが表情としてあふれてくるくらいには。

「よしー」

気合いを入れて、ギターを抱えて地下へ向かう。字面はカッコいいけど、単に防音室が地下にあるってだけの話だ。

一通り弾き終えて弦の調子を確認したらもう結構遅い時間になってしまっていた。たしか明日のフライトが11時出発なせいで確か……集合が朝の五時とかだった気がする。あとで確認しなくちゃ。そんなことを考えながら軽くシャワーを浴びて寝る準備をする。多少心配性であることを自他共に認める私は部屋に戻ってやつぱり今回も心配でスーツケースの中身を再チェックしてしまう。

洋服よし、念のための替えの弦よし、充電器よし、……、とチェックをすすめ、全て入っていることを確認して私は部屋の電気を消してベッドに入る。

明日が本当に楽しみだ。

翌日、桜高最寄り駅

いつもの駅についた……けど誰もいない。さすがに三十分前につくのは早すぎたかな。まあ、遅刻するよりはいいし。それにしても今日は寒い。朝だからというのもあるのだろうけど今にも雪が降るんじゃないかって思う。寒さにカタカタと震えながら先輩たちと先生

にメールを送ろうとすると、

「梓ちやくん！ おはよー！」

と、小さな声が聞こえた。声を潜めながらも私に聞こえるように挨拶してきたのは憂だ。自分のギターを背中にかけて淡いピンクの大きめのスーツケースを引いている。

「憂、スーツケース大きくない？」

「お姉ちゃんが何か忘れてないか心配でちよつと多めに持ってきてしまった」

「そゆことね。変わらないね憂は」

こんな調子に他愛ない会話を十分くらい重ねていると今度はスーツケースの音と共に、靴の硬い音が響いてきた。音のする方向をみるとページジュのコートに、歩きやすそうだけどちよつと踵のあるヒールを履いたさわ子先生だ。スーツケースもワインレッド？ みたいな深みのある赤でなんだかっこいい。

「さわ子先生、おはようございます」

「ええ、おはよう。今日は一段と冷えるわね」

「はい、寒いですよ。ところでどうしたんですか？ そのギター。さわ子先生も演奏を？」

「いやー、わたしはしないわよ。これはちよつと別の用事。向こうに着いて、機会があったら教えてあげるわ」

「ふーん。秘密ってわけですか。楽しみに待ってますね」

「ええ、そうしてちよつだい」

あとは……純だけだ。集合時間自体を私たちが乗る電車の発車十分前にしておいたから遅れることはないと思うんだけど……。と、思っていたら軽く走るスニーカーの音と軽いスーツケースの音がす

る。モノトーンで構成したラフな服に濃くも薄くもない水色のスーツケースが映える。スーツケースやけに小さいけど。

「おっはよー！ 五分前集合って思ってたらみんな早すぎだよー。先生もおはようございます。なんか服、かっこいいですね」

「おはよう。何年も見た生徒の晴れの舞台だもの、気合いも入るってものよ」

「純ちゃんおはよう。電車まだこないからホームのベンチでゆっくりしてようか」

そういつて私たちはまだ無人の改札を抜け、ホームの中程にあるベンチに腰を下ろす。

「お姉ちゃんたちは途中の駅で乗ってくるんだよね」

「そう、確か……ここから一時間くらい行ったところのN女大前駅ってところ」

「おっけー。私たちは時間通りだよってメールしとくね。それにしても梓ちゃん、四月からお姉ちゃんたちと同じ学校でしょくいいなあ」

「私だって自分の志望する分野のなかで一番いいところ近場で探したらあそこだったってだけだし。憂だってあそこに医学部あったら行ってたでしょ？」

「いやまあそうなんだけどね……」

「憂は優秀だし、優しいし、器用だし本当に医者向きだよなあー」

「突然ほめないでよ純ちゃん。あつ、電車来たよ！ ここで結構長く停まるみたいだね。なかのほうが暖かいだろうからはやく乗っちゃおうー」

こうして私たちは卒業旅行へと足を踏み出した。

——N女大学寮、共用スペース——

「よーし唯も時間通りきたな。じゃあ行くぞー！」

昨日から一夜明けて今日は出発日。梓たちは無事に予定してた電車に乗れたそうだから私たちもその電車に乗る。寮から駅まで大した距離ではなく、歩いて遅くても十分程度だから早めに出発した私たちはややのんきな気分だ。太陽はまだ上がってきていないけどだんだんと空が明るくなってきた。冬だから寒いことには変わらないけど。でも、あの冬特有のにおいがしてちよつと気分が盛り上がる。

「それにしてもアメリカ！ 楽しみだねえ！」

「ああ、それに唯、憂ちゃんと旅行行くの久しぶりなんじゃないのか？

……最近は大学忙しかったし」

「そうなんだよ！ もうその事も嬉しくってね。もう昨日はぐっすり早くから眠れたよ」

「普通そこは眠れなくなるものなんじゃないのか……」

「細かいことはいいんだよりっちゃん！ 今回は私もギー太もぼつちりだよー！」

「そんなこと言って……怪我するなよ？」

「しないって。そういえばさ、今回はムギちゃん、キーボード持ってきたんだねー！」

「ええ、去年はわざわざ送ってもらっちゃったから。今年は自分の手で持つてこうと思って」

「健気ですなあ……」

「どこのおばあちゃんだよ……」

話しながら歩いていると結構すぐ着いてしまうもので、私たちは駅についた。今の時間……から考えるともうホームに上がってて良さそう。あとたぶん五分もしたら梓たちの乗ってる電車がホームに入ってくるはずだ。念のため、いまならまだ戻ってもなんとかなるから唯に聞いておく。

「唯、パスポートとお金は持ったか？」

「あつたりまえだよ！ りっちゃんは大丈夫？」

「ん？ 私？ 一応見とくか」

そういつて唯は淡い赤のカバンの中身を、律は黄色のシヨルダーバッグの中を見る。なにも言わないところを見ると二人とも、しっかり入っていたのだろう。

「海外に着いたら引つたくりとかに遭わないように旅行用のポーチに入れとくんだぞ」

「それもぼつちりだよ。鞆のなかに入ってる」

「電車、きたわよ」

「あ！ あずにやんだ！ おくい！」

電車のドアが空いたので私たちも乗り込む。高三三人組と先生が電車には既に乗っていて、これでメンバー全員がそろったことになる。それぞれが挨拶をし終えたころ、先生が

「そしたら空港線に乗り換えるまでまだちよつと時間あるから、みんな寝ていいわよ。私が起こしてあげるから。朝早かったでしょう」

「先生は大丈夫なの？」

「私は昨日はワクワクで寝たのは八時だからなんの問題もありません！」

「それは大人としてどうなんだ……」

そう言ったものの、先生を除いたみんながうつらうつらとし始めた。やはり朝早かったのだろう。起きたら先生にお礼言わなきゃ、と半分くらいはもう眠っている頭で考えながら私は眠りに落ちた。

C a s s e t t e 7 旅の始まり

「先輩たち、つきますよ。起きてください。憂…は起きてるね。ほら、純、もうすぐ着くよ。起きて」

東京国際空港駅まであと五分というアナウンスが流れたため、一足早く起きた私は先輩たちと憂、純を起こす。先生はどうやら約束通り起きていてくれたみたいだけど、私がかきたのを見ると目線で「任せ」と伝えてきた。先生は自分だけ別の飛行機だからかそれなりの準備が必要なように書類の確認をしている。先輩たち、とくに律先輩を揺り起こしながら先生に聞いてみる

「ところで先生は何時発の便なんですか？」

「わたし？ 十一時三十五分発のJALの飛行機だけ」

「あれ？ 私たちも確かその時間でJALの飛行機だったような気が…もしかして先生、JAL505便だったりしますか？」

「ええ、確かそうだけど。じゃあ一緒の便なのね」

「偶然つてのものもあるものですね」

「さわちゃん、おはよ。偶然つてどうしたの？」

「おはよう。偶然つて言うのは、唯ちゃんたちと私、同じ飛行機みたい。別々にとつたけど一緒の飛行機になれるものなのね」

「それはすごい偶然だね。さわちゃんはビジネス？」

「ちょうどビジネスがセール中で安かったから思いきってビジネス買ったかった。人生初めてなのよ。唯ちゃんたちもビジネスなの？」

「いや、私たちはプレミアムエコノミーだよ？ エコノミーよりは広いけどビジネスほどじゃないってやつ。ムギちゃんのお父さんが手配してくれたのそのチケットだったみたいで」

「それはまたすごいわね」

駅が近づいてきたのか電車が減速を始めたようで体にちよつと前方向への力がかかる。

「そろそろ着くみたいなので降りる準備を……律先輩、二度寝しないでください。もう降りますよ」

「もう少し……もう少しだけ許して……」

「だめです。私が許しても電車が行っちゃいますから無駄ですよ」

無事律先輩の目も覚め、私たちは電車から降りて、空港の国際線ターミナルへ向かう。建物の中は暖房が効いていてほつとする。今回もムギ先輩のすすめでチエツクインと荷物預けを先にしてしまおう、ということになった。

「次のお客様、どうぞ」

「こんにちは。えっと、荷物を預けたいんですけど」

「はい。お預けする荷物はそちらのスーツケースとギターでよろしいでしょうか」

「ギター、やつぱり預けないとだめですか？」

「少々お待ちください……。お客様の乗る便は比較的混雑していない便になりますので機内持ち込みも可能ですが……。かなり大きなお荷物ですのでやはりお預けされることをお勧めいたします」

「そしたら……みんなどうする？ 私は預けてもいいと思うけど」

「私は預けます。結構スペースとつちやいますしね」

「私も預けようかな……。ギター、またあとで会おうね」「私と純も機内預けでお願いします」「私のキーボードも機内預けでお願いい〜」

「じゃあ、全員なので六人分お願いします」

「わかりました。スーツケースはこちらでお預かりいたしますが、ギターなどはあちらの包装用カウンターで包んだ後、こちらのタグと一緒に係員にお渡ししてください」

「どうもありがとうございます」

「それでは、良いフライトを」

そして私たちはカウンターの横にあるところでギターをしつかり

包んだあと（唯先輩はほんとうに『しっかり』包んだ）、ギターを係員のひとに渡して朝御飯を食べに向かった。空港のなかでもしつかりと食べられるところは結構あったから迷ってしまったけど結局パスタとトーストの店になった。どうやらムギ先輩おすすめの店のひとつらしい。

「あずにゃんは何にする?」

「私は……このトマトソーススパゲッティで」

「じゃあ私はこのボロネーゼかな」

「お姉ちゃんがそれなら……私はカルボナーラにしようかな。お姉ちゃんにも少し分けてあげるね。好きでしょ?」

「ありがとう憂々。他のみんなは?」

「カルボナーラでおねがい〜」

「私は……私はこのカニとトマトのスパゲッティで」

「純とかぶっちゃった。じゃあ……わたしはこのほうれん草とベーコンのやつ」

「私も滯とおなじやつ〜」

「みんな決めたわね〜。注文おねがいしま〜す」

量がそんなにあつたわけでもないのに三十分もしたらみんな朝食を食べ終わった。搭乗開始時間を考えるともう出国審査をしなきゃいけない時間になつている。旅のガイドブック曰く、この時期、要するに三月の上旬は私たちみたいな旅行者が結構たくさんいるから早目に行つた方がいいらしい。そのことをみんなに伝えると、

「先生、実はサファイア会員つてやつで、連れのひとつも含めて出国審査を優先レーンで通れるのよ」

「あ、それわたしもです。いつもフィンランドとか行くときに使つてるから」

「人数とかは大丈夫なの？」

「確か、会員一人あたり三人までは同行者も優先レーンに入れるはずよ」

「じゃあ大丈夫そうだな。じゃあみんな、行こうか」

「待つてくれ〜まだ唯と私がカブチーノ飲み終わってないから〜」

「しようがないやつだな……。まだ少し時間あるからゆっくりのんでいいぞ」

「滯先輩にしては優しいですね」

「ここで焦られてこぼしてもしたら……。と思うとな」

「お姉ちゃんならやつちやいそう……」

二人が飲み終わるのを待つて私たちは店を出る。出国審査には余裕の到着をしてロビーでみんなまつたりする。

「みんなお土産買った〜？」

「まだ出発すらしてないんだから、ここで買ってどうするんですか〜」
「ほんとだよ〜。でもなんか出発前なのにすごい疲れた感じがする〜。今日はドラムのスティックすら持てる気がしない…。私たちももう年なのか〜」

「あんたたちが年なら私はどうなるのよ!」

「なんかさわちゃんは別枠って感じ」

「なんかそれ……。スツゴいよくわかります。さわ子先生、私たちがおばあちゃんになっても若いまま学校で先生やってそうですよね」

「なにそれこわっ」

「そういう純もきようは一段と元気だよね」

「ま、まあ海外だしテンションも上がるでしょ。そんなことよりしっかり梓は計画たててきたの?」

「何を偉そうに……。でもぼっちりだよ。有名どころはしっかりと観られるようになってる」

「さすがだなく梓は、なんか丸投げしちゃってごめんな」

「これくらい大したことじゃないですよ。調べるのも楽しいし」

「そういつてもらえるとありがたいな。私の行きかかったところ、結

構入っててなかなか嬉しいよ。」

「そうそう！美味しそうなハンバーガーもあるし！」

「それはお前と唯だけだ。」

くだらだらしながら話しているとアナウンスが鳴った。どうやら搭乗が始まるようだ。私たちの搭乗は……番号的にもうすぐかな。どうやら先生は優先搭乗ってやつらしくて先に行ってしまった。私たちもできたら良かったんだけど、出国審査と違ってこっちは全生と別の予約だし、ムギ先輩ひとりじゃ全員はさすがにカバーしきれなかったらしい。遅かれ早かれ私たちの番は来るので準備していると順番が来た。

飛行機に乗ってしまった後は楽なもので機内食を除けば私たちがすることはほとんどない。十二時間ちよつと、椅子の上で過ごしてればもうそこは異国の地だ。よく考えるとすごいことだね。しかし、わたしの友達はこの感慨を台無しにする勢いで喜んでる。

「足下広っ。憂、プレミアムエコノミーってすごいんだな。わたしこれで十分だよ」

「純ちゃん落ち着いて……。でも足下広いね。飛行機のイメージと全然違う。なんかもっと狭いものだと思ってた」

「ま、先生は私たちよりももっとプレミアムなビジネスにいるんだからね。後でトイレ行くとときに見るといいよ。なんか個室みたいで豪華だから」

「へえー。十何時間もいるんだもんね。狭いところにずっといたら疲れちゃうよ。そういえば機内テレビとかあるけど寝なきやダメだよ？ 時差ボケ少しでも弱めたいなら」

「はいはいっと。お母さんじゃないんだから……。あつ、梓く、到着って現地時間で何時だっけ」

「確か……十時半くらいだった気がする」

「そしたらさっさと寝なきやだ」

「その前に昼の機内食があるよ、そのあと寝たら？」

「それもそうだね。そんでさー……」

純と憂が話し始めたので先輩たちに目を向けるとみんなでガイドブックを私が渡した行程表とつき合わせながら確認している。わたしも行く前になんか東海岸が舞台の映画でも見ようと思つて機内エンターテイメントを検索していると飛行機のアナウンスが入る。

「本日はJAL505便にご搭乗いただきありがとうございます。本機は十一時三十五分、東京国際空港発、十時三十分ニューヨーク、JFK空港到着です。まもなく離陸いたします。シートベルトサイン点灯中はシートベルトを着用し、席をお立ちになることのないようお願い致します」

「あずにゃんあずにゃん、JFKつてなあに？」

「ジョンFケネディのイニシャルですよ。アメリカの昔の大統領ですね」

「あずにゃん物知りだねえ」

「いや常識です……」

唯先輩の気の抜ける質問に答えていたら既に機体は動き始めた。どうやらもうすぐ滑走路に入るようで、得体の知れないワクワク感がある。飛行機のエンジン音が一瞬静かになったかと思つたら、飛行機は急に加速を始めた。隣の唯先輩なんか口開けたまま『おぉ』って眩してる。離陸すると同時に機体の振動は小さくなり、フワツとした感触に包まれる。あと二十分もしたら水平飛行に入るだろう。

何はともあれ、取り敢えず飛行機には全員無事乗れたから旅の第一段階成功って感じ。

前を見ると憂と純はまだおしゃべりしていて、その後ろではムギ先輩が本を読んでいる。その隣では漑先輩がヘッドホンで…あれゼン

ハイザーの高級なやつだ：音楽を聴いていて、その隣の律先輩は：寝てる。アイマスクもつけて完全装備だ。律先輩、今日は暇あれば寝てる気がする。そのまた後ろの、わたしの隣の唯先輩は既にヘッドホンをつけて映画鑑賞中。どんな映画見てたのか、ご飯の時に聞いてみよう。とりあえず、私も機内食の時間までは唯先輩みたいに映画でも見ることにした。

Cassette Series 2 旅行本番編
Cassette 8 到着

ニューヨークのタイムゾーンに合わせて機内の電気がつき始めた。いまは現地時間だと8時くらいだろうか。いくら椅子が広いとは言え、ずっと座りっぱなしというのは体の節々が痛くなる。隣を見ると、唯先輩はアイマスク（いつもの目が描かれたやつ）をしたまま寝ている。

体を動かしがてらトイレにでも行こうかと体を起こす。今回は窓側なので唯先輩を起こさないように気を付けながら（飛行機の真ん中くらいなのに二人席なの！）通路に出る。律先輩と漣先輩はまだ寝ているけれど、ムギ先輩はイヤホンで音楽を聴きながら小説を読んでいる。クラシック音楽とか聴いてそう。そのまえの二人もまだ寝てる。トイレから帰ってくると唯先輩が起きていた。自分の席に戻って、周りを起こさないように小声で話しかける。

「ごめんなさい、起こしちゃいましたか？」

「いやいや、あずにやんのせいじゃないから大丈夫だよ。アイマスクがずれて明るくなっちゃったから」

「それなら良かったです」

でも、私は知っている。そもそもこのアイマスクはなかなかできるやつで簡単にとれたりはいしないし、なにより唯先輩、座ってる間は寝相がいいから取れたりするはずがない。本当は私が前を通ったときに起きちゃったけど、私に気を使わせないようにしてくれたんだろう。でも、今はその優しさに甘えることにした。

「先輩はこれからどう……映画見るんですね……」

「こういうときじゃないと忙しくて映画見られないからね！ 着陸まであと二時間ちよつとあるみたいだし」

「そうですね、わたしももう一本映画でも見ることにします」

突然、目の前のディスプレイが映画の表示をやめ、着陸時の案内を始めた。私はもうエンドロールに入っていたから何てことはないけどどうやら唯先輩の映画はちょうどクライマックスだったように涙目だ。

CAさんが入国に必要な書類を必要な人に配っている。私たちは既にビザのようなものを日本ですべてあるから必要ない、とのことだ。英語だから何言ってるか私は全然わからなかったけど、前の席からムギ先輩が教えてくれた。恐らく配るのが終わったら飛行機は着陸態勢に入るのだろう。

「今、一番盛り上がってるシーンだったのに……かなしい……」

「きちんと残りの飛行時間を見ておかないからですよ。でも、また帰りの飛行機でも見られますから。大丈夫ですよ」

「そ、そうだったね。よかったよ。あつ、あずにゃん！ 高いビルだよ！ それにあの橋！ よく映画で見るやつ！」

「落ち着いてください……。でも、本当に映画でみるやつですよ」

「なんか……すごいね」

「語彙力ないんですか……」

「でも、テレビのなかでしか見たことがない景色が目の前にあるって不思議だね」

空港が見えてきた。どうやらなかなか大きい空港のようでたくさんの飛行機が見える。私たちの乗る飛行機はだんだんと高度を下げ、着陸に入ろうとする。

「そういえばね、この前テレビでやってたんだけど、飛行機事故が一番多いのって着陸のときらしいよ？」

「やめてくださいいよ……。心配になるじゃないですか……」

私たちの心配をよそに飛行機はぐんぐん高度を下げていく。タイヤが地面に接地したときの音と振動を感じるとすぐに、飛行機が逆噴射するときの特徴的な音が聞こえる。このまえ読んだトリビアに『エンジン逆噴射は別に前にエンジンをふかしてるわけではない』みたいなのがあつて驚いたつけ……。

「とおちやーく！ アメリカだよ」

「落ち着いてくださいってば……」

「滯！ 滯！ アメリカだ！ 自由の国だ！ 女神だ！」

「こつからは見えないけどな」

前から律先輩のはしゃぐ声が聞こえる。心なしか滯先輩もテンション上がっている気がする。

飛行機から降りるとそこは……日本人ばかりだった。いや、日本から来た便だから日本人だらけなのは当たり前なんだけど……。そう思いながら空港と飛行機をつなぐトンネルみたいなやつを通ると、空港に入つてすぐのところにあるベンチでさわこ先生が待っていた。先生と一緒に入国審査に並ぶ。ここでは行きで使った会員特典は使えないらしい。

「あれだよな！ 『さいとしーいんぐ、ふおーでいず』って言えばいいんだよな。ところで「さいとしーいんぐ」ってなんだ？ ふおーでいずは四日間ってことだろ？」

「律……さすがにボケだよな。ボケだと言ってくれ」

小声で律先輩に「観光つてことですよ」と教えてあげると慌てた様子でぶつぶつ言っていた。あれ、絶対に知らなかったやつだ……。

「そういえば私、去年のとき確か「サイドビジネス！」って言っちゃつ

て向こうの人、困ってただよね〜悪いことしちゃった〜」

「私は『I7? Really?』って、聞かれましたよ……」

「日本人は子供っぽくみえるって言われるからな……」

「ムギ先輩は雰囲気が大人数っぽいから大丈夫そうですね〜」

「そんなことないわよ〜。実際聞かれたことはないけど。梓ちゃんだって成長したんだし、今年は聞かれたりしないわ」

「そうだといいんですけどね……。うわっ、純、大丈夫？　なんか顔色微妙だけど」

「いや、本当にアメリカ来ちゃったとおもうとなんか緊張して……」

「そういうときは手に人って書いて飲み込むんだよ！」

「今回はちよつと違うからそのおまじないは効かなさそうですね……。あつでも話してたらなんかよくなってきた気がする」

「そりやよかった。最初も最初に体調崩したら残念だからね」

「濡ちゃんの言う通りよ。海外では日本にいるとき以上に気を付けないとー。私も何度も辛い目に遭ったことか……」

「先生の体験談なんですわ……」

「そろそろ順番来そうじゃないですか？　結構並んでる気がしますけど」

「あつ、順番来たみたい。私からいくわね〜」

「じゃあ、終わったらカウンターの向こうで待っててくれ」

「分かったわ」

ムギ先輩が入国審査カウンターに行った。私はムギ先輩の後ろに並んでいたのだから次だ。ちよつと緊張した気分ですわっていると、そんなに間隔を開けずに呼ばれた。

「Hey Nice to meet you」(やあ、こんにちは)

「Nice……Nice to meet you too」(ええ、こんにちは)

「What's for you come here?」(何をしにアメリカへ?)

「えつと……For sight seeing」(観光のために)

「OK. How long do you plan to stay here?」(どのくらいアメリカにいる予定?)

「For 4 days」(四日間)

「What about your company? Where's your parents」(一緒の人は? 両親はいないの?)

「カンパニー? 会社? いや違う……あつ、また子供だと思われているんだ! えつと…… I am 17 years old and I come here with my friends」(わたしは十七才で、友達と一緒に来ました)

「Really? 17?」(本当に? 17歳?)

そういつてパスポートをじつと見つめる。ちよつとして、

「OK, I'm sorry to make a mistake about your age, that's all here, you may go. Enjoy your trip!!」(オーケー。年齢、間違えてごめん。もう終わりです。行っていいですよ。旅行を楽しんで!)

そういつてガシャン! とパスポートにスタンプを押ししてくれた。パスポートを受け取り、近場のベンチにいる滯先輩とムギ先輩のところへ行く。

「また年齢間違われました……」

「あはは……元気出させて」

他のみんなが来るのを待つて入国ロビーを出る。そしたら荷物を受けとるため、あの回転寿司みたいなやつのところに行く。もう既に私たちの乗ってきた便の荷物は回り始めていたみたい。

「今回は回ってきまずように……回ってきまずように……」

「大丈夫だつて、そんなこと早々何度も起こるわけがないだろ？」

「うー……。あつ！ 私のエリザベス！ よかった。あとはスーツケーススーツケースと……きたきた」

「な？ 言っただろ？ みんなは？」

「私と純ちゃんの分が来ない……」

「憂と純ちゃんのスーツケースが来てないみたい」

「もうちよつとまってみたら？ そしたら来るかもよ？」

「梓はもう来てるのか？ いいなあ。つと、憂、あれ、わたしたちのじゃない？」

「あつほんとだ！ 私のギターもある」

「全員分が揃ったみたいですね。行きましようか」

「よーしじゃあいくぞー！」

「えつと……まずはホテルに荷物を預けるんですけど、ここはムギ先輩が何とかするって……。どうやって行くんですか？ 電車？ タクシー？」

「今日泊まる場所から送迎が来てるはずだから、みんなで探して？」

KOTOBUKI って書いてあるパネル持ってるはずだから」

「えつとどこにいるんだろう？」「本当にいるのか？」「いないですね」 「もうちよつとも向こうだったたりして」

「あつ、あれじゃない？ KOTOBUKI って書いてある！」

「でかしたぞ純ちゃん！ たぶんあの人だ。えつとそしたらムギ、頼む」

そう言われて、ムギ先輩はその人のところへ向かった。カバンから何か紙をだして見せて二言三言話したあと、私たちを手招きする。

「この人についていくわ」

「はーい、今回泊まる……このMホテルってところですよ。電車の便も良くて、中心に近くて、一等地の五ツ星ホテルじゃないですか」 「そうそう、こっちにいる間はそこに泊まるから。ーそこまで車で

行ってそこからは地下鉄とキャブで移動しましょう?」

「さんせーい」「さんせーい」「さんせーい」「キャブ?」

「黄色いタクシーのことですよ、唯先輩」

てくてくと運転手の人に突いていくと空港ロータリーにマイクロバスが止まっていた。乗ろうとすると運転手の人がスーツケースを持ってくれるそうなのでお言葉に甘え(通訳bymギ先輩)、私たちはバスに乗り込む。今回はどうやら貸し切りのようだ。

「ここから一時間くらいみたい」

「じゃあなににする?」

「今日どこ見に行くかの予習するぞー!」

「おっ、りっちゃん気合い入ってていいねー」

「そしたらまずはセントラルパーク行ってですね……」

・・・

こうして無事、ニューヨークに着いた。まだ着いたばかりだけどワクワクが止まらない。なんかいいフレーズが浮かぶ予感がする。

「よし！ フロントに荷物も預けたし、ニューヨーク観光いくぞ！」
「フロントが預かってくれた、というよりはホテルにいたらボーイさんが全部持って行ってくれましたけどね」

「ちよつといいところのお嬢様気分ですね。わたしホテルとかで荷物持ってもらうのちよつと夢だったりしたんですよ。映画でよく見るから」

「よかったね、憂。あずにゃん、まずはどこから？」

「セントラルパーク動物園ですね。ここから歩いていきます」

「セントラルパーク動物園っていうと、あのマダガスカルのレストランパーク動物園か？」

「はい、映画の中の動物園、本物にそっくりらしいですよ」

「マダガスカルってあれか？ 踊るのスキスキってやつ、私達が……何歳くらいの頃だっけ」

「えつと……私とお姉ちゃんで行ったときだから、私が小学……三年生のときだったはずですよ」

「そうすつともう十年前か。私、あれわざわざ映画館まで見に行つたんだよなあ。な、濡？」

「律に連れられて行ったのよね。おもしろそうな映画がある〜って」

「ほらほら、ロビーで喋っていてもしょうがないでしょう？ みんな、そろそろ行きましょ？」

「ほいほい」

そして我々一行はセントラルパークのそば（というより真横）にあるMホテルを出て、動物園に向かう。道路の標識がアルファベットだったり、通るタクシーがみんな黄色であったり、いろんな肌の色の人がいったりして、本当に外国なんだなあと深く思う。なにより周りで話されている言葉が英語だということが一番大きいけど。事前に調べていた通り、ホテルから動物園は本当に近くて歩いて十数分だった。

精算はその日の夜にまとめてやる、という話なので動物園の入場

料、約二十ドルは私が全員分立て替えておく。まあ海外用のデビットカードを持ってきてるからそれで払っちゃうんだけど。レシートをもらい、みんなにチケットを配って中に入る。

「あの鐘！ マダガスカルで見たやつじゃない？」

「確かに、そっくりだな」

「ペンギンもいるそうよ？ 隊長とか新人とかいるかしら」

「ジョークで名前がそうなってそうだな」

「見に行く前にお昼にしませんか？ 私もうすぐ限界……」

「純が死ぬ前にはなんとかお昼にありつけるようにしよう……。えつと……マップによると、ホットドッグ食べながら見られるみたいです。とりあえずはホットドッグ買いに行つて、また後から決めましよう」

「そりゃあいいな。よーし！ まずはホットドッグ屋台いくぞー！」

「りっちゃん競争だよ！ ……とところでどっちいけばいいの？」

「ついてきてください……迷子になられても困るので……」

「でかつ」

「これが本場のホットドッグ……。なんか思ってたのよりやけに大きいね。憂、一人で食べきれそう？ 私はお腹減ってるから余裕だけど」

「わたしも……たぶん食べられると思う。最後に食べたの、飛行機での朝の機内食だけだから」

「それじゃ、みんな買えたみたいだし行きましようか」

「よし！ みんなムギちゃんに続けー！」

「わ、わたしもわからないから……さわ子先生に続けー！」

「ええ？ 私だつてわからないわよ……。えつと、誰か地図持つてる？」

「さわちゃんここに地図あるよー」

「ありがとう唯ちゃん。で、えつとくそしたら、とりあえずはこの道を行けばいいのね」

「それじゃ、気を取り直して、行くぞー！」

アシカのエリアにきた。動物までアメリカサイズなのかと思っただけれどどうやらそんなことはないらしい。日本のアシカとあまり変わらない大きさだ。寒い中日光浴をしているのか、岩場の上でまったりと過ごしている。

「お姉ちゃん、お正月にこたつでダラダラしてる時、あんな感じだよ？」

「失礼な！ 私はエネルギーを貯めてるんだよ！」

「おーい唯ー、それじゃあんまりあのアシカと変わらないぞー」

「そ、そういえばアシカって英語で Sea Lion なんだね、全然ライオンっぽくないのに」

「あつ、話題露骨に逸らした」

「逸らすの下手すぎですよ……でも、確かにライオンのあの威厳はあんまり漂ってこないかも……」

「なんか見てると安心するどっしり感だよね」

「レッサーパンダだー！ かわいいー！」

「ぬいぐるみみたい〜」

「あれ、チーターじゃない？」

「走ってるそこ見てみたいよなあ。すっごい早いんでしょ？」

「車と同じくらいの速度が出るらしいですよ」

「はやっ」

「ペンギンいるー！」

「思ったよりいっぱいいるな」

「寝起きの唯、あんな感じじゃないか？ フラフラしてて」

「私を動物に例えるのがはやってるの!？」

動物園をぐるっと一周してもといたところまで戻ってきた。小さい動物園だとおもってたからあまり時間かからないかと思っただけ、想像以上に時間がかかった。楽しいからいいけど。もう時間は三時半過ぎになってしまった。

「見終わりましたね。おもったよりたくさん動物いましたよ」

「ここは動物たちの楽園だよ……」

「どの動物も大事にされてたね」

「ショップありますけどどうしますか？」

「キーホルダーを買おう！」

「これからのことを考えるとあまり長居はできなさそうなので、早く決めちゃいましょう」

私たちは動物園の売店（お土産物ショップ？）に行つてそれぞれ気に入ったキーホルダーを買う。9・98ドルなり。高い。聞いていた通りだけどアメリカはやっぱり物価が高い。私が何を買ったかって？ もちろんペンギンのキーホルダーですよ。もう私にとってはこの動物園の顔だからね。

最後までアライグマとアシカで迷っていた唯先輩を待つて（ほぼ置いていく感じで決めさせたんだけど）、私たちはセントラルパークを出た。次はニューヨークの顔、タイムズ・スクエアだ。夜にディスプレイの光で明るくなった時のも行くけど、まずは昼の明るいうちの方を見に行こうっていう算段だ。

「梓く、次、タイムズ・スクエアだよ。どうやって行くの？」

「歩きでもいいけど電車がいいんじゃない？ 地下鉄」

「そういえばさつき地下鉄の入り口みたいなのがあったよ」

「たぶんそれ。そこからなん駅か行くとタイムズ・スクエアにつくはず。それにのって……えつとそこにある楽器店に行くの」

「そうそう、私たち、軽音部だからな？ やっぱり旅の思い出は音楽に

関係したものがいいでしょ」

「と、言うわけで地下鉄にのりましょう。そんなに入り口は遠くないはずですよ」

セントラルパークを出て、すぐ横の通りにある地下鉄入り口に入る。券売機で全員分の 7 Days Limited Pass を購入する。33ドルなり。7 Days Limited Pass っていうのは簡単に言えば七日間地下鉄乗り放題チケットのこと。ほぼずつとニューヨークにいる予定だし、出国前に計算したら7 Days Limited Passの方が安かった。一人ずつ手渡しして失くさないようちよつと厳しく言う。名前が入っているわけではないから失くしたら二度と手元に帰ってくることはなく、最悪もう一度同じものを買わなければいけなくなってしまう。

電車がもうすぐ来るみたいなので、その行き先を確認し、改札へ向かう。日本のPASMOとかSuicaみたいにピツつてやる訳じゃなくて、カードをスキャンするときみたいに磁気読み取り機械にスライドさせるそう。よくわからないけど少なくとも周囲の人はそうしていた。私たちも一人ずつ機械に通して改札を通り抜ける。よく博物館とかにあるようなバーがくるくる回るタイプの改札でなかなか見慣れない。

「あつ」

「純ちゃん大丈夫？ おもいつきりぶつかったけど」

「いたた、大丈夫……。うまくスキャンできなかったみたい。もう一度つ」

「いてつ」

「濡く焦らなくていいぞく電車もまだ来てないし」

「ごめんごめん、もっかいやってみる」

「あだつ」

「またエラーだ」

「ゆつくり早すぎずやってみろつて」

「わかってるよ……。よつと……。まただめだ……」

「もしかして……。これ、濡ちゃんの回る呪いじゃ……」

「ゆいー！ ちよつと私も思ったけど言わない！」

「駅員さんのところ行く?」

「次やってダメだったら……。ダメだ……」

この改札、読み取りがなかなかボ……。古いようできつきからエラーになるひとがそこそこいる。連続で弾かれてる人はいないけど。諦めた滯先輩は意を決したように駅員さんのところへ行く。

「Eh……Excuse me?」(すみませーん)

「Hi? What's the matter with you?」(どうかされましたか?)

「Ah……I can't pass thorough here with this card. I just have bought this」(このカードで改札、通れないんです。いま買ったばかりなのに)

「OK, Please hand it to me. I'll check it out」(わかりました。私にください。確認してみます)

「This card is malfunctioning, we will replace this with one, Here you are」(このカード、故障していますね。なのでこれ、新しいカードと交換します)

「Thank you」(ありがとうございます)

あたらしいカードを受け取った先輩は今度こそ無事、改札を通り抜けてきた。

「ごめんな、私のせいで電車行っちゃったな」

「いえいえ、またすぐに来るので大丈夫ですよ。そんなことより、今回の旅行でもまた、回るもの恐怖症やるんですか?」

「いや前回もわざとやってたわけじゃないし……」

「梓ちゃん、回るもの恐怖症って?」

「えつとく去年のイギリス旅行の時、空港のラゲージエリアで滯先輩の荷物が一時的に見つからなかったり、回転寿司で寿司食べられずに演奏するはめになったりと、何事回るものとの因縁が滯先輩にはあるんだよ……」

「そりやまた運が悪いつすね。お祓いいきます?」

「どんなお祓いすんだよそれ……」

「それにしても滯ちゃん、英語うまくなったわね——」

「さすがに大学生ですからこれくらいは……」

「いや、唯ちゃんとかりつちゃんとかみてる……つい……ね?」

「どういう意味だよさわちゃん!」

「なんでもないわ」

「みんなー電車きたよー!」

「はいはいま行くよ」

ちよつと古さを感じさせる電車に乗り、三駅移動する。フリーパスをもつてるところうして気軽に短距離を電車移動できるのが便利だ。Times Square Station なる名前の駅で降りる。間違えようがない。

ちよつと広めの駅から地上に出る。そこには映画で何度も見た、あのタイムズスクエアの風景が広がっていた。あたりまえだけど。

「タイムズスクエアだ! 大きい通りだね」

「えつと、私たちが行くのは……もうちよつと南の方なのでこの道をまっすぐ行く感じですね」

「はいはい」

「人多いから迷子にならないようにするのよ」

二ブロックくらい歩くとお目当ての店があった。一目で楽器屋だとわかる外見、これ世界共通なんだろうか。東京でも京都でもロンドンでもニューヨークでも変わらない気がする。中にはいるとどうやらちよつと人が少ない時間帯のようで店のなかはそんなに混んではいなかった。人気店だと聞いていたからちよつと覚悟してはいたけれど。

「ムギーなに買うか決めたく？」

「私は……どうしようかしら。ギターやらないからピック買っても仕方ないし〜」

「それなら私とムギでなんかお揃いのもの買わないか？ ギターはギター組で、ベースはベース組でお揃いのピックそれぞれ買うらしいからさ〜」

「りっちゃんいいわね！ そうしましょ？ でも私たちがどっちも使えるものとなると……」

「じゃあこのスコアケースとかどうだ？ 二人とも使うし、なんかカッコいいし〜」

「いいわね〜そうしましょ！」

「私たちもレジにくつと、もうみんないるな」

「律先輩はなに買ったんですか？」

「ふっふ〜ん。私はこのオレンジのスコアケースだ！ ムギと色ちがいでお揃い〜」

「おおーなんかいい感じ。いいじゃないですか。あつ、ちよつとだけ失礼します」

「素晴らしい私はレジの奥のカスタマーカウンターみたいなのところに行つてある商品を受けとる。中身は内緒だ。」

「梓ちゃんも戻つてきたしそろそろ行かない？ 日もそろそろ落ちるんじゃない？〜」

「このあとはエンパイア・ステート・ビルだっけ？」

「はい。ニューヨーク一帯が見えるらしいですよ。そのビル自体もライトアップされてなかなかきれいだそうですね〜」

「楽しみだな〜」

「ここからどうやっていくの？ 歩き？」

「純、歩くの好きだよね……。今回は電車でも歩いてもらいたいして変わ

らないし、基本的に大通りだから治安もまとまれば大して悪くないし……今回は歩きにしようか」

「じゃ、梓、道案内よろしく」

「人任せな……、唯先輩、ギー太の兄弟モデル見てないで行きますよ！」

そう言っつて楽器店を出る。ここからエンパイア・ステート・ビルは本当に近くて歩いて十分くらい。地下鉄を使おうにもちよつと歩いて戻らないといけないから大して時間は変わらないのだ。さすが世界有数の高さを誇るビルというだけあってなかなか大きい。すぐに見えてきた。

「おーこれがエンパイア・ステート・ビルつてやつか？」

「昔からの憧れだったのよね」

「さわちゃん、来たことなかったんですか？」

「大人になるといろいろ忙しくて来れないものなのよ」

「そういうものなんですかね。大人にはなりたくないなあー」

「あら、りっちゃんだっていつかは大人になるのよ。いつまでその肌のハリとツヤが持つかしらね……」

「さわちゃんが不敵に笑い出した……こわっ」

話ながら歩いていると時間が経つのは早いもので（十分も歩いてないけど）もうビルの入り口まできた。ここのチケット、本来は60ドルとかするんだけど、今回は琴吹家パワーにより割引チケットだ。先にムギ先輩から預かっておいたものをみんなに配る。最上階の102階までいけるチケットだ。

チケットを係員の人に見せて、エレベーターで昇る。あのトンネル特有の耳のつまる感覚がする。102階についた。ドアが開く。降りると目の前に広がるのは落ちる太陽とニューヨークの街並み。すっごいきれいだ。時間ちようどだったみたい。あぶないあぶない。

「おおー！ すっごいきれいな！」

「確かにこりやすーいな……」

「車、たくさんいるんだな」

「太陽の光がきれいね〜」

「あれ、セントラルパークじゃない？ さつきまでいたところ」
「夕日と街並みっていいよね〜」

みんなが思い思いに感想を述べ合う。当の私は言葉がでないほど感動していた。だって本当にきれいだったし。ここから日が暮れ、ニューヨークはその眠らない街としての真価を発揮する、そうさ。まだ日が完全には暮れてないから私にはわからない。

日が暮れた。超きれい。美しさを表すための語彙力が一瞬ですべて吹っ飛んじゃうくらいにはきれい。もう回りのみんなを見ても『うわーきれい〜』としか言っていない。

「みんなで写真とりませんか？ あそこに集合写真でカメラ置くための台ありますし」

「いいね〜。このなかで、一番きれいにとれるカメラ持つてるのは……漣か。漣〜おねがい〜」

「お願いされなくても最初から出すつもりだったよ、ほら、いまとつてる人たちがいなくなったら撮るからな」

写真を撮られるからか、私を含めみんな、手鏡を出して身だしなみをチェックし始める。女の子だもんね。しようがないよ。

「よーし、空いたぞ〜！」

「カメラを置いて、十秒タイマー、三枚撮影つと。じゃあいくぞー！」
そう言つて漣先輩はカメラの向きを確認してからシャッターボタンを押し、こちらへ戻ってくる。十秒もあるし余裕そうさ。タイマーが残り三秒を知らせる光が放たれ、そのきっかり三秒後、1秒間隔で三枚写真を撮った。漣先輩が満足げにカメラのディスプレイを見ているところを見ると、なかなかいい写りだったのだろう。少なくとも漣先輩は。

「そろそろ帰りましようか。帰ってホテルで夕食を食べて、それに明後日のための練習もしなきゃいけないし」

「そうさぞ〜。今回の旅の目的、卒業旅行もそうだけど、ムギの家の会

社のセレモニーが目的だからな。忘れるなよ」

「練習……ティータイム……」

「大丈夫よ唯ちゃん、先生が全員分のケーキ、ホテルに送っておくようさつき手配しておいたから」

「紅茶も部屋で使ってるのと同じものを用意してあるわ」

「私頑張るよ!!」

「じゃあ帰りましょうか。帰りはどうするの？ 梓ちゃん」

「普通に地下鉄かな……」

「ホテルにいまから帰るから荷物の用意お願いって言ったらここま
で、車回してくれるそうよ?」

「なんとゴージャスな……」

「あと七八分で着くそうだからもうちょっと夜景をみて、そのあと下
に行きましようか」

夜景を見終わり、ビルの入り口に行くところには……リムジンがい
た。なんで。その他に止まっている車で私たち全員が入りそうな車
はない。つてことは……

「あれね。普通の車でいいっていったのに」

「リ、リムジンだと? 私あんなの乗るのはじめてなんだけど……」

「私たちの中で初めてじゃないの、ムギだけだろ……」

「じゃ、行きましようか」

私たちは初めてのリムジンに恐る恐る乗り込む。座り心地のとて
もいい椅子が気持ちいい。ここからホテルまでは車で数分と言った
ところか。

ホテルのチェックイン自体は昼、ここについたときに終わっていた
ので私たちはカードキーを受け取り、この前決めた各々の部屋へ向か
う。一流ホテルなだけあって部屋は困ってしまうくらいに広い。こ
れ絶対二人分の広さじゃないよ。

メールの着信音があった。別の部屋にいるムギ先輩からメールが
きたみたい。少し休憩して、30分後に夕食にしようとのことだ。わ

かりました、と返事を出してから、私も唯先輩にならって荷物を広げる。二人がスーツケースを広げててもまだスペースがあるって何事。唯先輩とおしゃべりしながら荷物を出していたらもう30分過ぎていたようでノックの音が聞こえた。持つてくものは携帯電話位なので準備に大して時間もかからない。

夕食を食べるに階下のレストランに行くところには異様な光景が広がっていた。ごはんがおしゃべりイタリアンなのである。普段から庶民を自称する私には驚きの光景であった。というより先輩方みんな驚いてる。

「たしかみんな、アレルギーとかないから今日のコースってメニューにしちゃった。大丈夫？」

「メニューは問題ないけど……私たちマナーとか全然わからないけどいいの？」

「よっぽど変なことをせずに、普通に食べていけば問題ないわ？ 心配なら私も少しくらいなら基本的なことを教えられるけど」

「お願いします」

七人の声が重なった瞬間だった。さわちゃんもわからないんだ……。

その夕御飯は終始緊張感が漂っていた。失敗したら大恥をかくことくらいは流石に理解している私たちはいつにない真剣さでムギ先輩の話聞いたのだった。そのお陰で私たちは無事お高いコース料理もそれなりのマナーをもって食べられたのだった。あと、よく『マナーなんか気にしてたら味がわからなくなる』というひとがいるけれど、あれば真つ赤な嘘。美味しいものはおいしい。世界の不変の真理だ。

食事をしたら練習だ。とはいっても明日があるのでそんなには長くできないけど。一時間半くらいかな。後にティータイムを控えた唯先輩は上機嫌で練習へのモチベが過去最高。いつもこれくらい出してくれたらいいんだけど……。今回はさわちゃん指導のもと、それ

それぞれの曲の最終調整第一回だ。最終とあるけど第二回を明日やる。

「りっちゃんドラム走りすぎくもうちよつと抑えて〜」

「ごめんごめんついついテンションあがっちゃって〜」

「気を付けなさいよ？ リズム隊が大事なんだから！」

「はーい、じゃあもつかいさっきのところから」

「憂ちゃん、そこ、もっと主張して大丈夫よ？ そこはあなたがメインなんだからしつかりした感じで」

「は、はい！」

「おーさわちゃんが顧問っぽいことしてる」

「いつもしてるでしようが」

「いつもは部室でまったりしてるけどな」

「七人バンド、みんなしつかり音合ってるし、音に厚みがでてなかなかいいじゃない！」

「そりや嬉しいなあ」

「でもりっちゃんはドラム走りすぎ」

「気を付けます……」

「じゃあもう一回最初から。ギターだけで」

「はーい」

「ふうう終わった終わった〜」

練習を終え、今は先輩たちの三人部屋でティータイムです。私たちの部屋も広いと思っただけどこの部屋はもっと広い。分割していいと思う。ここまで来たら。

「なんとかなりそうだな〜明後日」

「ああ、よく噛み合ってたと思う」

「なんか、学校の外で演奏するのはじめてだから緊張しますね」

「自信持ちなさい！ あなたたち、そこら辺に放り出してもたぶん音楽で生きていけるくらいにはうまくなってるから」

「さわちゃんが優しい…オーバーだけど…」

.....

深夜とも言える時間帯になったため、ティーパーティーはお開きとなり、みんな自分の部屋に帰る。私たちもシャワーを浴び（大きなバスタブがあつて、その横には入浴剤が置いてあつた）（唯先輩が途中で入ってきたけど別のお話）、寝る用意をする。今回は唯先輩、200V対応のヘアアイロンを持ってきたようで去年みたいになることはなかった。

「あずにゃん、明日はどこいくんだっけ？」

「あしたはまず自由の女神ですね。あとはあの有名な橋を渡って向こう岸の有名なハンバーガー屋さんに行きますよ」

「楽しみだなあ」

「ええ、本当に楽しみです」

携帯の充電をして、ベッドにはいる。なんとダブルベッドがツインなのだ。一人で寝るサイズじゃない。さすがアメリカン。

唯先輩はベッドにはいるなり寝てしまったようだ。私も頭上灯を消し、完全な暗闇と静寂（唯先輩の寝息は聞こえるけど）を手に入れる。わたしも今日はどうやら疲れたみたいだ。明日の目覚ましを確認して、まぶたを閉じた。明日が本当に楽しみで仕方がない。

目覚ましのアラーム音が聞こえる。ぼんやりとしたまま枕元の机においたはずの携帯電話を探す。ない。どうやら寝ている間に落としてしまったようで携帯は机の下にあった。アラームを止め、隣で寝ている唯先輩を起こす。

「唯先輩、朝です。おきてください」

「ハンバーガーにステーキ入れたら噛みきれないよ」

「どんな夢見てるんですか……。ほら、起きてください。そもそも朝、髪の毛のセットとかいろいろあるから早く起こしてって言ったの唯先輩じゃないですか……」

「あと五分、あと五分だけ寝かせて憂」

「私は梓だからだめです。そういつて五分だけ寝られる人なんていないんですから。ほら、起きてください」

「わかったよ。つてあずにやん？　なんで？」

「なんでつて同室じゃないですか……」

「はっ、そうだった！　旅行中だった！」

「目も覚めたみたいですし、さっさと準備しますよ。朝食まであと三十分くらいしかないので」

「りよーかい！」

一人ずつシャワーを浴びて、出掛ける準備をする。まずは朝食だからそっちのための用意の方が先だけ。他の部屋の人々にはおはようメールを出す。向こうも準備中だから返信には時間がかかるだろう。髪の毛のセットをして、服が合うか最終チェックをする。その他もろもろの準備をして（これに時間がかかるのだ）、メールをチェックする。

おかしい。朝食のために集合する時間の五分前なのに憂と純、先生からは返信があったけど隣の部屋からはなにも返信がない。まさか……。電話をかけながら廊下に出て、隣の部屋のドアを叩く。しまっ

た……。漣先輩とムギ先輩がいるから安心してたけど、あの人たちもあの人たちで天然なところあるんだった。

ドアをノックしていると電話に漣先輩が出た。

「はい。ふあゝ。秋山です。どちらさまですか」

『どちらさまですか』じゃないですよ!! 朝です!! 寝坊です!!」

「梓の声……? 朝……? うわっやばっ。律! ムギ! 起きろ! 寝坊した!」

「とりあえず手伝うんで鍵開けてください……」

「いまムギが行った!」

そう言い電話が切れる。数瞬後、ドアが開きムギ先輩が私を部屋に
入れる。

「ごめんなさい! 三人とも目覚ましかけるの忘れてて……」

「わかったのではやくしまししょう! 他の人たちはもう準備できてる
んで」

「梓ほんとすまん! いま準備するから他のみんなにあと十五分待っ
てもらえるようにメールしてくれ」

「十分です。十分で用意してください」

「梓がこわい……」

先輩たちが準備し終わったのはその十三分後のことだった。その
あいだ準備がすでに終わった私たちは部屋が中央にある私と唯先輩
の部屋に集まり、その日のすることを確認していた。

「今日は自由の女神行くんだ。どこまで行くの? 中まで入れるって
聞いたことあるけど」

「今回はなんとスペシナルなチケットが手に入ったからそれを使うん
だよ」

「そりゃいいね。その後は?」

「行程送ったでしようが……。そのあとは海を渡ってハンバーガー食べに行こうと思って。人気の店らしくて日本にいる間に予約しちゃった」

「梓ちゃん、そういうとこまめだよね」

「憂に言われるとなんかアレな気分だなあ」

「みんなごめん。準備できたわ」

「じゃ、行こうか。昼がすごい多いらしいから食べ過ぎないようにね」

「そうだよ？ お姉ちゃん」

「やだなあくいくら私でも朝からそんなにたくさんは食べないよ」

「うう……。食べ過ぎた……」

「だから言ったじゃないですか……。食べ過ぎないようにって」

「だって……。あんなに美味しそうなものがたくさんあったら食べないわけにはいかないよ……」

「そういう人でしたね唯先輩って……」

「おい梓く私たち出るのにあと十分くれ。朝バタバタしてたせいで荷物が散らかってて」

「しようがないですね……。わかりました。終わったら連絡してください」

「わたしも一度部屋に戻るわ。今日の準備がまだ終わってないの」

「さわちゃんも寝坊したの？」

「大人の女にはいろいろあるのよ」

「はいはいかっこいいよさわちゃん」

「棒読みなのがちよつと癪にさわるけど許してあげるわ」

「やっさしい」

「じゃ、また十分後に私たちの部屋で」

そう言っって各々の部屋に入っていく。ついでに今回の部屋割りは

先輩ルーム↓私と唯先輩ルーム↓後輩ルームの順につらなっていて、ちよつと離れて先生の部屋だ。

十分後、ドアのノックの音がするのでドアの穴から外を除くとさわちゃんがいた。ドアを開け迎え入れる。どうせすぐに出ることになるけど。開けっぱなしの部屋を繋げるためのドアからみんなに声をかける。

「用意できましたかー?」

「できたよー! 行こー!」

部屋の鍵を閉め、全員で地下鉄チケットのチェックをする。これがないとどこにも行けないからね。みんな持ってるのを確認して、ホテルから出る。

「さむっ」

「最低気温2℃ですからね……」

「旅行するあったかさじゃないよこれは……」

「じゃあいつ卒業旅行するんですか……」

「でも正直去年のロンドンよりも寒いんじゃないのか?」

「ロンドンと同緯度の土地だと比較的あったかいですからね。それに対してここはやっぱり冷えますよ」

ロンドンの時よりも圧倒的に寒い。私も去年のときより一枚多く服を着ている。唯先輩はオレンジのダウンを着ているから比較的あったかそうだ。ほかの先輩はみんなコートを着ているからか寒そうだ。ダウンには勝てない。

まずは昨日と同じようにホテルから徒歩五分くらいの地下鉄の駅に続く階段を降りる。今日はチケットを買う必要もなく、なれた手つきで皆、純と濬先輩も含め改札を通る。ここから十数駅はなれたマン

ハツタン島の南端の駅が今日の最初の目的地だ。そこからフェリーに乗って自由の女神の足元に行くのだ。フェリーのチケットとなんと一日限定数百人の自由の女神の王冠の中に入るチケットが人数分購入できた。また古い電車がホームに滑り込んでくる。運良く空いているスペースがあつたのでそこにみんなが固まる。

「唯々自由の女神ってフランスからきたんだぞく知ってた？」

「フランスから？ あんな大きいのが？ りっちゃん、私を騙そうつたつてそうはいかないよ。私だつて大学生になつてそれなりに知識を身に付けたからね」

「いやほんとだつて……」

「憂、もしかしてほんとの話なの？」

「そうだよ。フランスとアメリカの友好のしるしとして贈られたとかそんな話だつたと思う」

「なー言つただろー。ほんとだつて」

「でもあんな大きいのもうやつて運んだんだらうね？」

「でつかいタンカーみたいな繋いで運んだんじゃないのか？」

「そんなわけないだろ……。あれ、分解されて持ってきたんだよ」

「バラバラ殺人事件!!」

「人聞きの悪いことを言うんじゃない」

「じゃあここでクイズ！」

「じゃーじゃん！」

「唯ちゃん効果音ありがとく。では問題です。自由の女神はその足であるものを踏んでいます。何を踏んでいるでしょうか？ さわちやんは回答禁止ねく知ってるからく」

「ほんとに知ってるの？」

「もう！ 失礼ね！ さすがに知ってるわよ。だからいーわない。でもたぶんわからないと思うからあと五分してもなにも出てこなかったらヒントあげる。いい？ ムギちゃん」

「いいですよ」

「はいっ」

「はい唯ちゃん」

「うどん！」

「ざんねーん、違いまーす」

「唯……おまえ踏むってだけでうどんだと思っただろう」

「はい！」

「はいりっちゃん」

「ホームベース」

「アメリカは野球で有名だものね〜でも違うわ〜」

「滯ちゃんは答えなくていいの？」

「私は知ってるから……」

「そうなの？ さすが滯ちゃん、物知りだね〜」

「はい！」

「はい純ちゃん！」

「アクセルとブレーキ！」

「ふせいにくい。ついでにアクセルとブレーキはどちらも右足で踏むのよっ。」

「えっそうなの？」

「マニュアル車の名残みたい」

「へ〜」

「じゃあそろそろヒントの時間かしらね。ヒント！ 名前をよく考えてみて。あとは……アメリカは自由の国よ」

「名前……自由の女神……わかった！」

「はい唯ちゃん！」

「手錠！」

「おいしい！ もっと古典的！」

「私わかった！」

「はい憂ちゃん」

「鎖じゃないですか？」

「せいにくい。鎖を踏んでるのはアメリカの自由と平等を表してるそ
うよ。じゃあ憂ちゃんに十ポイント〜」

「そのポイントが集まるとどうなるの？ ムギちゃんがケーキくれる

の?」

「いや? あげただけよ。楽しいでしょ? ポイント」

「なにもないんですか……。ほかにクイズは……」

「その必要はなさそうよ?」

「へ?」

「だってむもう次の駅で降りるんでしょ? サウスフェリーって駅」

「そ、そうです。あつぶない忘れるとこだった」

「もう! あずにゃんがしつかりしないとだめなんだよ!」

「そうだぞ梓! 残念大学生なめるなよ!」

「威張ることじゃないでしょうが……」

そうこうしているうちに目的の駅につき、電車から降りる。この地下鉄の駅から出て徒歩数分だ。ニューヨークも地下鉄網が発達してのおかげで歩く距離が少なくてもいいのは本当に助かる。何日も観光するから足の負担はできるだけ減らしておきたい。海辺に少し近くなつたこともあり、さらに寒く感じる。海からの風が吹くとみんなを体を縮めてしまう。厳しい寒さに耐えながら歩いていると、フェリー乗り場の入り口までついた。私たちがなかなか早く来たことも相まってまだ人は少ない。

「あずさくこっからどうすんの? すぐに船乗ってあそこの島まで行くの?」

「まずは手荷物検査ですね。律先輩、なんか変なものもってきてたりしませんよね……」

「なんか持ってきてきたら空港で入国できないっつーの……」

私たちも他の人に倣って荷物検査の列に並ぶ。人が少ないとは言え、いやむしろそのせいかもしれないけど係員の人が少ないと人がはける速度が遅い。ただ、まだ予約したフェリーの出発まではまだ時間があるので余裕だ。

「あずにゃん、自由の女神さまってなんの本持ってるの? スコア?」

「私も知らないです……。スコアだけはないと思いますけど……」
「もしかしたら国歌の楽譜かもしれないじゃく。ねえねえ、りっちゃん知ってる？」

「私知ってるわけないと思って聞いてるだろ……。もちろん知らないけど。漣は？」

「私は来る前に調べたから知ってるけど……。私が言っても面白くないでしょ？」

「そうだよねくやつぱりクイズだよな」

「聖書……とか？」

「残念、純ちゃんちがーう。まあ惜しいといえば惜しいのかもしれないけど……」

「こればかりは全然わからないな。さわちゃんヒントちょうだい！」

「えく、じゃあ、1776年、かな」

「はい！」

「お？ 唯わかるのか」

「1776年はね、アメリカが独立した年だよ！ だからあれはアメリカの独立の紙？ みたいなやつだと思う」

「みたいなの……というより独立宣言そのものね。でも唯ちゃんよく知ってたわね」

「私はもう前の唯じゃないんだよ！」

「でもどうして知ってたんですか？ 受験で勉強したわけでもないでしょうし……」

「やだなあ、こんなの常識だよ」

「うちの大学の一般必修教養でちようど世界史やってたところなんだよ。唯もしらばっくれてないで正直に言え」

「やーん漣ちゃんなんで言っちゃうの」

「ところで必修ってことは律先輩も唯先輩たちと世界史の授業受けてたんじゃ……」

「私はその授業休んでたかも」

「わかりましたもう言わなくていいです大体わかりました……」

「梓、あと二三人したら私たちみたいだよ」

「ほんとだ」

前の人達が終わったようなので前の先輩たちから順に荷物検査を受けていく。空港と同じように鞆の中から電子機器、要するにカメラとか携帯とかを出してトレイに乗せて、また別のトレイに鞆を入れてX線検査機を通す。それとC叔父に私たちもどこでもドアみたいな金属検出器をくぐる。途中、前で唯先輩が金属検出器に引っかかってちよつとびっくりしたけど、どうやら腕時計を取り忘れてただけらしい。

「あずにゃん〜びっくりしたよ〜」

「あそこに『腕時計なども反応することもありますのでお外しください』って書いてあるじゃないですか……」

「読めないよ〜」

全員荷物検査が終わったようなのでフェリー乗り場を散策する。乗船開始時間までまだあと三十分ほどあり結構暇なのだ。みんなで写真を撮ったりして時間をつぶしていたけどやっぱり時間があまる。みんなでベンチに座って一息ついていたらなんだか甘くておいしそうなにおいが漂ってきた。

「これってクレープのにおいじゃない？ 食べようよ！」

「おっ、いいな〜。私も食べる〜」

「私も〜」

こんなノリで結局全員買うことになってしまった。え？ 私？ もちろん買いましたよ。ストロベリークリームってオーソドックスなやつを。

クレープを食べ終わったころ（唯先輩は二つ目を買っていた。所持金大丈夫なのだろうか……結構値段するんだけど）時計を見るとフェ

リーの乗船開始時刻になっており、待機列にはそれなりの人がいた。私たちもその列に続く。フェリーを見ると私たちの想像の何倍も大きくて、こんなに必要なの？　と思う。すると

「あずにゃん！　うしろ！　うしろ！」

「へ？　先輩どう……」

その光景に私は目を見開いた。嘘です。でもそれくらいには驚いた。というのも私たちが来た時にはまだ人もどちらかといえは少なかつたのが今は長蛇の列なのだ。たぶん私たちが来た時が荷物検査が混み始める直前だったのだろう。早く来ておいたことに心から安堵する。

フェリーが棧橋に錨を下ろし、そのすぐ後にフェリーへの連絡路が接続された。列も前のロープがとられたようでゆっくりと前から進み始める。私たちも前の人たちが動き始めたのを見て歩き始める。比較的前の方に並んでいた私たちはフェリーで眺めがよい最上階の、海際の席をとれた。椅子に座って十分くらいたっただろうか、フェリーの汽笛が私たちの出航を知らせる。のっそりとどんちゃんみたいに海上を歩む。前方にもともと自由の女神自体は見えていたものの、やはり大きくなってくるとそれとは別種の感慨がわいてくる。私たちはフェリーに乗ってもやっぱり自由の女神をつまむ一種の遠近感を使った写真を撮ったりして遊んでいた。ついでにだけこのトリックアートは陸上でやったほうが絶対にいい。なぜかって、地面が揺れているとうまくつまめた写真を撮るのに10テイクくらい必要だったからだ。

船が減速し（もともとがゆっくりだから減速してるとかわからないけど）、自由の女神側の棧橋につく。やっぱり足元から見ると自由の女神は遠くから見るのよりもぜんぜんおっきい。当たり前のことなんだけれども、百聞は一見に如かずってやつだ。船が完全に停泊し、連絡橋がのびる。いち早く船に乗った私たちはエレベーターと同じで結局降りるのは最後の方になってしまった。

「おうこれが自由の女神か」

「さつきまでも見てたじゃないですか」

「近くで見るとなんか写真じゃないんだなって思うよな」

「りっちゃんそれすっごいよくわかる」

「梓、たしか私たちは自由の女神の中、入れるんだよな。チケットある？」

「はい、ありますよ。でもこのチケットじゃ入れなくてあそこのインフォメーションセンターでリストバンドに変えてもらわないと」

「そっか。じゃあみんなあそこのインフォメーションセンター行くぞー」

「はい」

インフォメーションセンターに来た。受付の人にプリントアウトしたクラウンチケット（上に上るためのチケットをそう呼ぶらしい）をみせ、リストバンドをもらい、その紙にスタンプを押してもらった。またどうやら、『あの王冠の中を上るときはカメラと携帯、薬とメガネしか持っていけないのでそのセンターにあるロッカーにみんな預けてください』とのことだ。ゆっくり話してくれたのでムギ先輩なしでも結構聞き取れた……と思う。あつてるかわからないからなんともいえないけど。

みんなリュックだったりショルダーバッグだったりをまとめて二つのロッカーに預けておく。カギは滯先輩と私が一人ずつ持つ。

「よーしじゃあ自由の女神上るぞー！」

「いえーいー」

自由の女神の足元の台座のところまできた。前調べのとおり、この台座は博物館になってるらしい。先にクラウンまでの整理券みたい

なもの（1時間ごと）に何人まで、という制限があつて私たち大所帯はあと20分くらい待つ必要があるらしい）を受け取った。20分はその博物館で時間をつぶそうと思うがいかなせん英文が読めないので写真を見るのにとどまつてしまう。

「へー昔は自由の女神つて銅色だったんだ」

「いまは青だよ」

「なんで色変わったんだらうね」

「酸化でもしたんじゃない?」

「ある意味あつてるわね」

「というと?」

「あれも酸性雨で表面の銅が溶けちゃったのよ。そしたらもともとの金属の色が出てきちゃったの。授業でやったでしょ? 酸性雨」

「やったやった! 銅像溶けちゃうつて話もそういえば聞きましたね……」

「さわこ先生さすが……」

「だてに高校教師やつてないわよ!」

「りっちゃん! 運ばれてる時の写真あるよ!」

「うわ! 細か! でもよく見たら一つ一つはなかなか大きいな」

「全部で214個に分けて運ばれたらしいぞ」

「細かつ。それにしても濔ちゃん、よく英語読めるね」

「その部分だけなんとかつて感じだ」

「そろそろ時間じゃないか? もういけるだろ?」

「そうだな。梓呼んでくる」

濔先輩が呼びに来たので私も純と憂、先生を連れて先輩たちと合流

する。看板を見てその指示の通りに進む。ほんの少し歩くとさつき来た、広めの広場につく。さつきと同じ係員さんに整理券を人数分見せて手渡しすると、それぞれのリストバンドもそこで回収されるようだ。一人ずつ階段への道を通してリストバンドを回収されていく。あまりスペースもないので、受付が終わった人から一方通行のらせん階段を一段一段、少し息を切らせながら上がっていく。普段は会話後こときで息を切らせるなんてことはないんだけどいかんせん階段が長い。本当に長い。まるで無間地獄だ。行ったことないけど。それにこのらせん階段、横幅が狭くてちよつとこわい。

なんとかすべての階段を登り切ってクラウンに到着する。そこからは私たちの乗ってきたフェリーが見え、マンハッタン島が見えた。私に続いて先輩方、先生、純と憂の順であがってくる。唯先輩なんか息も絶え絶えだ。

「わあーこれは絶景だね〜！」

「見ろよ！ 私たちの乗ってきた船、めっちゃちっちゃいぞ！」

「なんか揺れてません……？」

「そんなことないと思うけど……でも高くてやっぱ怖いわね」

「写真撮ろーつと！」

「ストラップきちんと腕にかけとけよー！ 落とすからなー！」

「はいはいー！」

一通り興奮した後、そこにいる係員の人全員で記念写真でもいかがですか？ と聞いてきたのでお言葉に甘える。一瞬観光地にありがちな写真サービスかと思ったけど周りに機械がないことを考えるとどうやら係員の人の善意らしい。とてもありがたい。

「Say ”CHEESE!” (はい、チーズ！)」

カメラのシャッター音が鳴り、そのまま何枚か撮る。やけにいい出来でみんな上機嫌だ。係員の人に感謝を伝え、今度は降りる専用の階段を下りる。

「英語でもチーズ！ って写真撮る時言うんだね」

「確かに、それ私も思った。なんかチーズって日本語だけだと思ってたけどそもそもチーズって外国語だもんなく」

「昔の人なんて言ってたんだらう。最後がイ段で終わればいいんでしょう？ サムライー！ とかって言ってたのかな」

「そんなわけないだろ……。昔は写真一枚とるのになん十分もかかったからみんな口は結んだままならしいぞ」

「りっちゃんよく知ってるね」

「この前『ドヤれる雑学集』って本に書いてあった」

「なんでそんな小学生みたいな本読んでるんだよ……」

「しかもあの写真ってとってる間、まったく動けないらしいですよ」

「なん十分も立ちっぱなし!? そんなの無理だよ……」

「そのためにみんな肘の高さくらいの台と一緒に写真撮ったらしいですよ。よっかかれるように」

「そういえば歴史の教科書もみんな立ってる写真は何かに寄りかかっている気がする！」

「純こそよくそんな雑学知ってるね」

「この前小説読んでたらそんな話が合ったんだよ」

「それにしても階段長いね、降りるだけでも疲れちゃうよ」

「このくらいだとたぶんいまひぎの部分くらいじゃないかしら。もうすぐ足よ」

「ぷっ、ひぎって。ふふっ、膝のあたりってもうちよっといい表現あるでしょうに……」

「溼先輩がツボってる……珍しい……」

「そう珍しくもないぞ……溼、なんかたまに沸点おかしいから……」

長い長いといえども階段には終わりがあられるわけで、足元についた。

やっぱりさつきと同じ係員さんが入り口に立っていて、みんな軽く会釈して通る。向こうも小さく手を振ってくれた。最後に自由の女神を背景に一枚集合写真をとったらこんどこそフェリー乗り場に向かう。道中、何か忘れているなうと思ったらみんなの鞆だった。危ない危ない。帰りのフェリーもそれなりに乗り場から混んでいる。ただ次の便で乗れそう。また「さつきと同じフェリーが停泊する。行きと同じように向きは逆だけでも船に搭乗する。今回は入ったのが後ろの方なこともあり一階席だ。」

「自由の女神みたね〜」

「ああ、ニューヨークに来たら外せないからな！」

「そういえばあずにゃん、今日のお昼ご飯は？」

「あれだけ食べたのにもうおなか減ったのかよ……」

「橋を渡ってハンバーガーです。量も質もニューヨークらしいですよ」

「さつすが〜」

こう話しているとマンハッタン島から12時の時報の鐘が聞こえた。レストランの予約をした一時には間に合いそう。